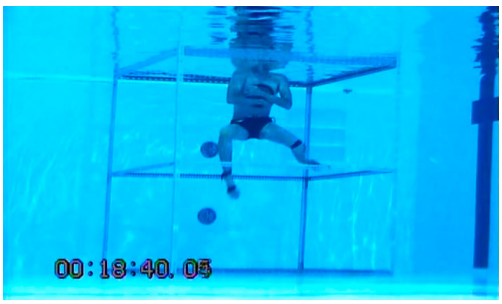
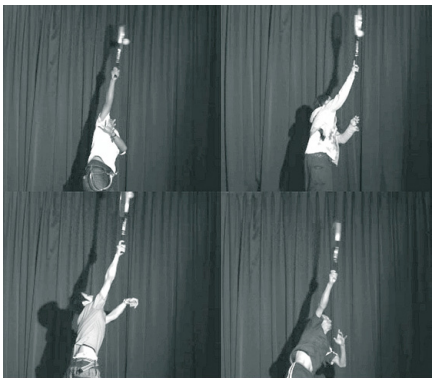
平成25年度
慶應義塾大学体育研究所
活動報告書

特集：基盤研究





目　　次

「巻　頭　言」 所長　石手　靖…… 1

Ⅰ．特集　体育研究所基盤研究　村山光義…… 3

Ⅱ．研究活動記録（研究委員会）

１．個人研究業績・研究教育活動・研究助成……13

２．所内定例研究会発表要旨……24

３．慶應義塾内の補助を受けた研究の報告……32

４．大学体育連合中央研修会参加報告……36

Ⅲ．教育活動記録

Ⅲ－１．授業の実施（教育委員会）

１．平成25年度体育科目の履修者統計……41

２．授業評価の実施……44

３．通信教育対象科目……51

４．塾内における授業担当……52

Ⅲ―２．スポーツイベントの開催（スポーツ振興委員会）

１．塾長杯・塾内競技大会……53

２．公開講座……55

３．所内施設の開放……55

Ⅲ―3．他機関との連携

１．公開講座……57

２．一貫校連携……57

３．体育会支援……57

Ⅳ．業務活動記録（黒田主事）……61

巻　頭　言

大学体育研究所
所　長　石　手　　靖

この度、平成25年度慶應義塾大学体育研究所活動報告書を発行することができましたこと、ひとえに関係各位の皆様の御協力の賜物と思い、この場を借りて御礼申し上げます。それぞれの原稿を執筆、あるいはデータ等を取りまとめてくださった方々、編集に携わってくださった方々は勿論のことではありますが、この報告書に記載されているすべての事項は、あえて言うまでもなく、この１年間、体育研究所の研究、教育の活動に御協力頂いた多くの皆様方の成果であり、そのご尽力に対し深く感謝するとともに厚く御礼申し上げます。

体育研究所では所員一同、様々な分野で世界が急激に変化している中で、大学はその変化にどう対応し、学生や社会のニーズにどうこたえていくかを常に念頭に置き活動しています。その中で、慶應義塾大学における体育研究所の目的の一つとして、「行動力に溢れた塾生を育てること」と掲げています。大学において学生は社会に出てしっかりと仕事をするための能力を身に付けなくてはなりません。そして、その社会の中でリーダーとしての活躍が期待されています。そのためには思考や判断の材料となる広く深い学問を身に付けることが大事であると同時に、人と交流する能力も必要です。体育科目の中の体育実技の授業はさまざまな種目を取り入れて実施していますが、それらの共通点は、学生同士のコミュニケーションの場ということです。我々は体育実技のクラスが社会性や主体性、積極性や協調性を磨く良い機会であると考えています。したがって、一人でも多くの塾生が体育実技の授業を履修することを希望しています。

ここで、塾生への体育実技の授業履修促進を狙った二件についてご紹介させていただきます。先ずは、「当世塾生気質」と題した体育科目紹介のリーフレットを作成し、平成25年４月に新入生を中心とした塾生に配布致しました。慶應義塾大学の日吉キャンパスには多くのスポーツ施設が存在しますが、その多くは主に体育会の学生が使用しており体育会に入っていない学生にとってはあまりなじみのない場所です。日吉キャンパスの入口に位置する陸上競技場も例外ではなく、協生館地階プールも同様です。我々はこのような現状の中、体育実技を履修することにより、塾生が日々の大学生活の中で身近にスポーツが出来る環境を整えようとしています。もう一つは、体育研究所のホームページの充実を図ったことです。これまでは数名の理工学部の学生の力を借りて編集や更新をしてきましたが、より多くの情報量を発信できるように専門業者に依頼して、これまで以上に見やすいホームページを作成致しました。まだまだ改善工夫の余地は多々ありますが、是非一度ご覧ください。これらの試みが功を奏し、前年度に比べ体育科目の履修者数は増加しました。

最後に私事ではありますが、これまで８年間に渡り、所長職をお勤め頂いた前任の植田史生君より引き継ぎ、平成25年10月より所長の任を拝命致しました。まだまだ力不足ではございますが、皆様からのご指導ご鞭撻を賜り、体育研究所ならびに慶應義塾の発展に寄与する所存でございます。今後も体育研究所の活動にご注目頂き、また忌憚のないご意見をお聞かせ頂ければ幸いに存じます。

Ⅰ．特集：
基　盤　研　究

体育研究所はこのたび「基盤研究」という新たに継続的な研究プロジェクトを開始しました。

運動・スポーツ・体育科学の研究課題は広範な領域に広がっています。体育研究所の所員はそれぞれの専門領域を中心に、運動・スポーツ・体育という事象を対象とし、それぞれの専門である人文･社会･自然という異なった学問分野の視点から研究を行い数多くの成果を公表してきました。また体育研究所としてもプロジェクトを実施してきましたがこれらは周年事業として行われる期間限定的なものでした。平成24年には体育研究所設立50周年記念シンポジウムが開催され「大学に於ける体育」はどうあるべきか、「体育研究所は今後どのような活動をすべきか」という議論が行われました。このシンポジウムの議論がもとになり、体育研究所として明確なテーマをもって継続的な研究を展開する必要性がその後確認され、「基盤研究」という位置づけで継続的なプロジェクトを展開することとなりました。

教育研究機関としての体育研究所では授業として体育課目（実技・講義）を展開していますが、この授業の質の維持・向上が課題となっています。また授業以外の各種サービスプログラムをどのように展開するかも課題となっています。そして一般塾生はもとより塾内組織である体育会をはじめとする各種スポーツ競技団体への貢献をどのように進めていくべきか、また義塾外の諸組織とどのように連携・貢献していくかという課題もあります。これらの課題に対して「基盤研究」では「体育」という視座を中心に研究を展開しようと三つのテーマを設定しました。それは、① FD 実践としての体育授業プログラムの在り方、② 学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ、③ 大学体育の教育理念とカリキュラム、です。

「基盤研究」を「体育」という視座から展開するということは、体育研究所が実施している授業やその他のサービスプログラムについて教育学的意義や効果の検討を進めることを意味しています。このことは大学に於ける体育課目の必要・不要論に対しても明確な答えを提供することが期待されています。

コアテーマ①：FD 実践としての体育授業プログラムの在り方（その１）

「自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発」

班長：村松　憲

班員：村山光義・板垣悦子・野口和行・
　　東海林祐子（慶應義塾大学総合政策学部）

本グループでは、自己効力感（ある課題を達成するために必要な行動をどの程度うまく実施できるかの確信、Bandura 1977）及び社会的スキル（円滑な人間関係を形成・維持するために必要な行動、菊地 1988）の向上に体育実技がどのように貢献するのかという体育研究所が取り組んできたこれまでの研究（加藤ほか 2011、村山ほか 2012、野口ほか 2012）を更にすすめ、どのようなプログラムが有効なのかという観点を持ち研究を進めている。本稿では本グループのこれまでの研究を簡潔に紹介するとともに、現在行っている取組みについて紹介する。

野口ほか（2012）は体育実技の中に社会的スキルの向上を意図しコミュニケーションの促進を図るプログラムを取り入れることにより、

●プログラムを取り入れた群は社会的スキルのみならず、自己効力感も向上した。社会的スキルの向上を意図した介入が、社会的スキルと高い相関のある自己効力感にもプラスに作用したと考えられる。

● 1 回目が低得点の者ほど得点増加が大きかったことから、社会的スキル向上のプログラムは社会的スキルの低いものに効果的であると考えられると報告した。図 1 は、プログ

ラムの有無による１、２回目の比較（社会的スキルの点数）である。図２は１回目の社会的スキル得点が低いものほど２回目に増加した点数が多いことを示す図である。また村山ほか（2012）は社会的スキルと自己効力感テストを実施した結果、経年による経験の影響、体育実技の実践およびその繰り返しによってこれらの点数が向上する可能性を示唆している。なお本グループでは、これまで行ってきた上記研究結果が、合宿形式でのシーズンスポーツにおいてもあてはまるのかどうか、既にアンケートを実施して分析をはじめている。今のところ合宿形式授業は、社会的スキルと自己効力感に対して異なる効果を示す傾向がみられているが、詳細については今後明らかにする予定である。

自己効力感・社会的スキルに加え、本グループが取り組んでいる指標にライフスキルがある。東海林ほか（2012）は単元前の大学生のライフスキルの獲得レベルに着目し、体育授業におけるライフスキル獲得への影響と違いを検証することを目的とした研究を行っており、本グループでも同様の指標を用いて体育研究所が実施する体育実技においても、体育実技がライフスキル獲得に寄与するのかどうか、すでにアンケート調査を実施し、現在検討を始めている。

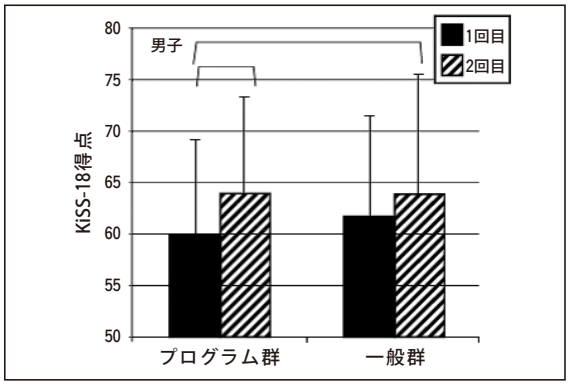


図１　社会的スキル（KiSS-18）の１回目と２回目の比較およびプログラム有りと無しの比較（有意差検定：P＜0.01）（野口ら，2013文献リスト２）より）

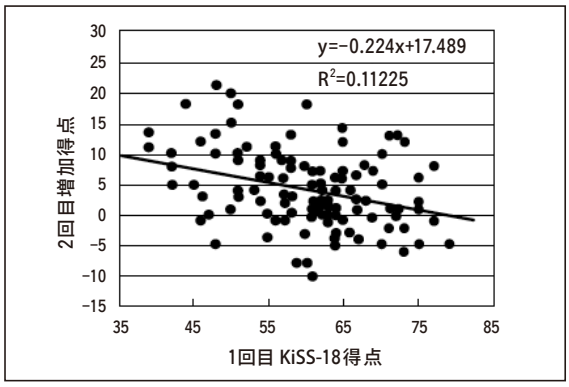


図２　社会的スキル（KiSS-18）の１回目と増加得点との関係（野口ら，2013文献リスト２）より）

コアテーマ①：FD 実践としての体育授業プログラムの在り方（その２）

「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか？　―大学体育における動機づけ雰囲気の検討―」

班長：山内　賢

班員：佐々木玲子・加藤大仁・永田直也・近藤明彦

大学における体育担当教員は、履修者が更なる運動やスポーツ活動に参加したくなるような働きかけができているのか。もしかしたら教員の指導は、履修者の運動やスポーツ活動への参加を、体育授業で途切れさせていないか。本班は、上記の課題に対して FD（FacultyDevelopment：教員の資質向上）実践としての体育授業プログラムの在り方として、近年、体育心理学分野において注目されている動機づけ雰囲気理論を用いて教員の指導方法の改善を目指す。

大学における教養としての体育では、何を習得することが期待されているのか。様々なことが期待されるが、そのひとつとして「運動やスポーツ活動を継続する態度」があるだろう。運動やスポーツ活動の減少は、体力の低下や健康度の悪化に関連している。さらに

は、メンタルヘルスの悪化やコミュニケーション力の低下にも関連しており、生涯に渡って運動やスポーツ活動を継続することは、質の高い生活の基盤を支える重要な要因と考えられる。運動やスポーツ活動の重要性が示される中で大学における教養としての体育は、履修者が教育機関において受ける最後の体育授業となる可能性が高く、運動やスポーツ活動を継続する態度を養う最後の機会なのかもしれない。また、単なる運動やスポーツ活動の実践の場に留まらず、最新の研究による知見やスポーツの文化を知ることができるなど、「知」を獲得する場としても重要な役割を持っていることは明白であろう。

運動やスポーツ活動の参加・継続には、運動やスポーツに対する内発的動機づけが良い影響を与えることが示されている。運動やスポーツに対する内発的動機づけとは、運動やスポーツ活動を「医者が薦めるから」や「健康のため」といった他の目的を達成するためではなく、「運動がしたい」や「スポーツが楽しい」などといったそれ自体を目的とすることである。この内発的動機づけには、運動やスポーツ実施中の目標を「上達すること」や「新しいスキルを獲得すること」とし、努力することを評価することが良い影響をもたらすことが示されている。これらは熟達目標と呼ばれる。また、ともに運動やスポーツをする仲間が熟達目標を共有すること、すなわち集団が熟達雰囲気を持つことによって、内発的動機づけが高まることが示されている。そのため、体育において履修者を更なる運動やスポーツ活動へ促すためには、授業の雰囲気を熟達雰囲気にすることが有効である。これらは、「動機づけ雰囲気理論」と呼ばれる。この動機づけ雰囲気について強調したい点は、熟達雰囲気は教員が熟達目標を強調することによって作り出すことが可能であり、教員が果たす役割が大きいことである。先行研究では教員の意図的な指導によって生徒が感じる雰囲気が変化し、動機づけに影響を与えることを示されている。これまでのFDは、履修者にどのような変容がみられたかといった点が注目されていたが、教員がどのような指導を行っているかについては注目されてこなかった。本班は、教員の指導方法に着目し、より良い授業を目指した改善法を検討していく。

体育授業における動機づけ雰囲気研究は、中学・高等学校における検討が主となり、大学体育においては皆無である。そのため、本研究プロジェクトは、動機づけ雰囲気を測る尺度の作成から開始し、現状の体育授業の検討を踏まえ、授業を熟達雰囲気とする指導方法・内容の考案を目指す。そして、履修者の運動やスポーツ活動に対して内発的動機づけを高め、継続的な参加ができるような働きかけをしていく。

コアテーマ②：学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ

「一般学生の体力･運動能力に関する測定データを管理分析するシステム構築」

班長：石手　靖

班員：山内　賢・吉田泰将・須田芳正・
　　加藤幸司・鳥海　崇・坂井利彰

本グループの研究課題は大きく分けて３つに分類できる。

１つめは体力測定の実施結果の活用に関する産学連携プロジェクトである。本塾には約３万人弱の学生がおり毎年健康診断を実施しているため、塾生の健康状態についてはほぼ把握できているものの、現在体力測定は実施しておらず、学生の体力レベルの把握および他大学の学生らのそれとの比較などは近年実施されていない。そのため塾生の健康状態を議論する際、医学的な面においてのみの議論であり、体育学的な面についての議論が出来ていないことが、本塾における現状の課題で

ある。そこで本グループでは塾生の体力測定を実施し、その結果の把握と結果を活用して塾生の生活の質向上に寄与するべく対応していくことを目的とする。具体的には体育実技授業内やイベント時に体力測定を実施し、これを基礎データとする。この基礎データを毎年集めるとともに年ごとの回収データ数を増やすことで塾生の体力レベルを議論するうえで極めて貴重なデータとなる。得られたデータは産学連携の下に管理・分析することでの活用を想定している。具体的にはスポーツメーカーとの共同研究あるいは委託研究を想定している。すでに平成25年度においてはアディダス社との共同研究として体育会ソッカー部および庭球部においてそれぞれの試合における走量を測定した。また、平成26年度においては日吉キャンパス新入生歓迎イベントとして体力測定イベントの実施を予定しており、システムデザインマネジメント研究科との共同イベントの開催も予定している。

２つめは体力測定に関連したタレント発掘プロジェクトであり、体力測定のデータを活用することで「塾生へのタレント発掘プログラム」の確立を目指す。慶應義塾には毎年約7000人弱の新入生が入学し、様々な体育会、運動系サークルに所属している、しかし、その誰もがスポーツをする上で重要な自身の身体的特徴を把握することなく、スポーツ種目を選択しているのが現状である。そこで前述の体力測定と関連して新入生の身体的特徴を測定し、その新入生が有する身体資源を最大限発揮できるスポーツ種目を提案するということを検討している。また、体育会やスポーツ系サークルの側でも各スポーツ種目に適した人材を受け入れ適切に指導・育成していくために必要な指導者の養成を目的として専門知識・経験を有する講師を招聘しての講習会を実施し、またそれぞれの体育会、スポーツ系サークルの指導者から回収する現場からのフィードバックを蓄積することで慶應義塾独自のコーチングモデルの確立を目指す。

３つめは新たなスポーツ文化の醸成である。大学のスポーツ組織においてはあまり考慮されてこなかったが、近年の競技会においては勝敗の決め手となりうる分野である情報戦略、ゲーム分析についても専用の PC ソフトの購入と専門スタッフによる講習会を実施する。これらは体育会、スポーツ系サークルの競技力向上に資するのはもちろんであるが、それ以外にもスポーツの役割である「みる」・「する」・「ささえる」のうちの「みる」スポーツの能力向上に寄与し、これは６年後に開催される東京五輪でのスポーツ観戦をより有意義にするものと考えられる。

コアテーマ ③：大学体育の教育理念とカリキュラム

「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」

班長：村山光義

班員：植田史生・奥山靜代・
　　佐藤正伸（文教大学）

本研究班のねらいは、現在、様々に語られている大学教育を取り巻く課題を系統的にまとめ、大学体育への課題として検証するとともに、慶應義塾の実情との関係にも考察を加え、今後の諸策を検討することである。

現在の大学に関わる諸問題について考える時、大きく以下の３つのポイントが見えてくる。まず第１に大学質保障･大学認証基準（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）への取り組みとその評価等、大学教育に対する社会的要請が高まっている。これに対し、大学体育分野においては、「体育・スポーツ系大学学長会議」が2011年に「体育スポーツ学分野における教育の質保証 ―― 参照基準と教育関連調査結果 ――」を提示している。また「公益社団法人全国大学体育連合・関連団体の提言

2010」といった大学体育の教育内容の検討およびその実践の必要性も全国的に投げかけられている。こうした大学教育の大きな流れに「体育・スポーツ」という教育がどのように機能し貢献すべきかが問われている。

第２にそうした社会的事情に対して、学内・大学内に目を向ければ、学生を取り巻く課題も重要なポイントとなる。学生の心身の健康保持増進、キャンパスライフの充実としていかに大学が機能できるかも大きな課題である。キャンパスの学生相談室を訪れる学生の増加が、その根の深さを物語っている。大学においてうまく仲間作りができなかったり、キャンパスに居場所のない学生、学業と就職活動に悩む学生等、多様な問題を今の学生は抱えている。単に学術的枠組みのみでカリキュラムが構成され、質の高い学生を社会に送り出せるか？初年次教育としてのプログラム、カリキュラム内の具体的枠組み等、検討すべきことがあり、「体育」の持つ教育的効果に期待される部分があることも事実である。我々はここで、もう一度「体育」とは何か、を問い直し、学生と向き合うことが課題である。

最後に、「スポーツ」を取り巻く社会的事情の変化に目を向ける必要がある。2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることが決定した。スポーツ基本法・基本計画への対応や地域総合型スポーツクラブとの関係の模索等、大学を拠点としたスポーツ振興も社会的貢献として求められているところである。しかし、競技力向上と国民のスポーツ活動の推進が謳われるスポーツ政策に対し、大学において主役である大学生に伝えていく事は何であろうか？オリンピック精神とはメダルを取ることではなく、スポーツを通じて平和な社会を築ける人間を拡大することである。社会において国民がその精神に基づき東京開催を支える方法は多様である。ボランティアにならずとも、自らがスポーツを実践し、スポーツ文化を享受・伝承することも重要である。この意味においても、スポーツの精神と実践を伝えられる「体育」というカリキュラムを軸に、キャンパス内にどのような体育・スポーツ教育を展開すべきか、学術・科学的専門家集団として体育研究所に課せられた責任は重いと考えられる。

我が班は上記のポイントを念頭に、他の研究班のベースともなりうる理念的な指針を模索し、提示することを目指している。そのため、まず関連文献・書籍の洗い出し、文献レビューから課題の分類、細部のテーマ抽出を行うこととした。上記に基づき、① 大学という視点（社会情勢とグローバル化・大学比較（日本と海外の大学）・歴史的変化）、② 体育という視点（大学体育の課題・体育とは何か）。③ スポーツという視点（スポーツの課題）においてその範囲を把握することを進行中である。その上で、塾における課題とを照らし合わせ、体育研究所の課題解決指針を検討する。

本基盤研究立ち上げから、平成25年度までにレビューした文献・書籍については文末に示すが、その内、所内における中間報告において“大学とグローバリゼーション”に関しての解説をレビューした。以下にその概要を抜粋しておく。

現在の大学においては、グローバリゼーションによる商品化・標準化・評価といった大学の変容の経緯と現状を踏まえながら、短期的視野を長期的視野に拡大する必要がある。大学を現在的価値のみで評価してはならず、大学の固有の機能は、次世代の育成、次世代への学問の継承であることを考慮すべきである。また、グローバリゼーションは現実であると同時にイデオロギーでもある。そこで、旧来の望ましい大学像と新米のネオリベラルなそれとの対立が生じている。古い理念を鍛え直し、別のグローバリゼーションの可能性、マス化ユニバーサル化の学生の変化へ

の配慮等への課題解決をする新しい理念哲学を作り出さねばならない。（文献リスト：１）

体育においても古い理念を振り返り、現代に生きる新たな哲学が求められている。今後は、こうした文献レビューを深めながら、新たな体育・スポーツを探るとともに、内外の研究者とのシンポジウム・討論などを加え、さらに検討を進める予定である。

文献（順不同）
１）吉田　文（2013）グローバリゼーションと大学：広田照幸他編，日本の大学とグローバリゼーション，社会変動と大学，岩波書店.
２）広田照幸（2013）日本の大学とグローバリゼーション:広田照幸他編，日本の大学とグローバリゼーション，社会変動と大学，岩波書店.
３）松繁寿和（2013）グローバル化による競争環境の変化と求められる人材：広田照幸他編，日本の大学とグローバリゼーション，社会変動と大学，岩波書店.
４）小林勝法（2010）大学教育の質保証と大学体育の課題，体育の科学，60（８），581-585.
５）小林勝法，山口一美（2012）大学教養体育の FD プログラムの体系化，教育研究所紀要，（21），81-88.
６）杉山　進（2009）大学体育の教養について，体育・スポーツ哲学研究，31（２），87-93.
７）伴　義孝（1996）体育とは何か ―― 大学改革論議からの発信 ――，関西大学出版部.
８）苅谷剛彦（2012）グローバル化時代の大学論 ①：アメリカの大学・ニッポンの大学，中央公論新書.
９）苅谷剛彦（2012）グローバル化時代の大学論 ②：イギリスの大学・ニッポンの大学カレッジ，チュートリアル，エリート教育，中央公論新書.
10）苅谷剛彦（2013）高等教育システムの階層性 ―― ニッポンの大学の謎（エニグマ）：広田照幸他編，大衆化する大学 ―― 学生の多様化をどうみるか ――，岩波書店.
11）須藤敏昭（2012）大学教育改革と授業研究―― 大学教育実践の「現場」から，東信堂.
12）前田明洋（2013）ナレッジ・コモンズ ――グローバル人材を育むキャンパス空間 ――，日経 BP 社.
13）アラン・ブリンクリ他，小原芳明・監訳（2005）シカゴ大学教授法ハンドブック（The Chicago Handbook for Teachers）玉川大学出版部.

Ⅱ．研究活動記録

（研究委員会）

１．個人研究業績・研究教育活動・研究助成

石手　　靖　【教授】

著書・論文・執筆・報告書

なし

学会発表等

村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ科学分野の LLLT 研究の現状”，第17回日本レーザー・スポーツ医科学学会・研究レポート（慶應義塾大学・横浜），2013.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・日本バレーボール学会理事・渉外委員長
・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事
・横浜ビーチバレーボール連盟理事
・大学ライフスポーツ教育学会理事
・「能登再生フィールド学」構築・実践プロジェクト実行委員会委員

研究助成等

・“ブラインドサッカーによる身体知・障がい理解教育プログラムの開発と KEIO フットサルアドベンチャー2013の開催”，調整予算（日吉）プロジェクト事業，46.4210万円

近藤　明彦　【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

・村山光義、近藤明彦，“「大学体育研究」の新たな視座を求めて”，体育研究所紀要，第53巻：15～23頁，2014.

学会発表等

・Akihiko Kondo, “Social attitudes in Sport of High School Students”, The ISSP 13th World Congress of Sport Psychology Beijing, China, July 21–25, 2013.
・山内　賢　近藤明彦　小牧久見子　丸田　巖　市河　勉，日本体育学会第64回大会，ポール・ウォーキングにおける運動強度と気分尺度の動態～高齢者を対象としたポール・ウォーキングの勧めと運動処方～，立命館大学びわこ・くさつキャンパス（滋賀県）：予稿集 p409，2013年８月.

佐々木　玲子　【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（著書）

・佐々木玲子（分担執筆；翻訳）“ダンスの解剖・運動学大事典，第７章 上肢”，K.Clippinger 著，森下はるみ監訳，西村書店，315-388，2013.

（論文）

・石沢順子，佐々木玲子，松嵜洋子，吉武裕，“保育中の活動場面による身体活動水準の違い”，発育発達研究，62：1-11，2014
・佐々木玲子，石沢順子，“観察的評価からみた幼児の基本的動作の習熟度・評価の有効性についての検討”，慶應義塾大学体育研究所紀要，53-1：1-10，2014
・佐々木玲子，“乳幼児の動作獲得と習熟”，子どもと発育発達，11-4：213-217，2014
・佐々木玲子，“跳ぶ～リズミカルに～”，子どもと発育発達，11- 3：180-182，2013
・佐々木玲子，“跳ぶ～高く，遠く～”，子どもと発育発達，11-2：118-120，2013

（執筆）

・佐々木玲子，“子どもの動きをよく見よう②～指導に生かすために”，コーチング・クリニック，28-2：56-59，2014

・佐々木玲子，“子どもの動きをよく見よう①～幼児期の動きの観察と評価”，コーチング・クリニック，28-1：56-59，2014

・佐々木玲子，“健やかな心と体を育む運動遊び” 幼稚園じほう，41-10：5-11，2013

・佐々木玲子，“幼児の発達段階に着目して「アクティブ・チャイルド・プログラム」を考える～その②”，コーチング・クリニック，27-9：54-57，2013

・佐々木玲子，“幼児の発達段階に着目して「アクティブ・チャイルド・プログラム」を考える～その①”，コーチング・クリニック，27-8：2013

（取材協力）

・佐々木玲子，“遊びによって培われる子どもの調整力”，コーチング・クリニック，27-6：14-17，2013

学会発表等

・石沢順子，佐々木玲子，松嵜洋子，吉武裕，“活動強度および活動分類からみた幼児の日常身体活動量の検討”，日本発育発達学会第12回大会，大阪成蹊大学，2014.3.15-16.

・石沢順子，佐々木玲子，松嵜洋子，吉武裕，“保護者および保育者からみた幼児の身体活動水準に関する主観的評価と実測値との関係”，第15回日本生涯スポーツ学会，静岡県熱海市，2013.10.12-13.

・佐々木玲子，石沢順子，“幼児における基本的な動作の観察的評価による検討”，日本体育学会第64回大会，立命館大学，2013.8.28-30.

・Sasaki Reiko, Ishizawa Junko, Okuyama Shizuyo, Kusuhara Keiko, “Fundamental movement skills and daily physical activity levels in preschool children”, 18th annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE，2013.6.26-29.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演・講師）

・健康運動指導士養成講習会，“青少年期の成長発達とトレーニング”，東京，2013年５月，11月.

・日体協ジュニアスポーツ指導員養成講習会，“ジュニア期のスポーツの考え方”，大阪，2013年10月.

・日体協公認スポーツ指導者養成講習会（スポーツプログラマー），“ジュニア期のスポーツ”，東京，2013年11月.

・日体協公認競技別指導者養成講習会（ダンススポーツ専門科目），「ダンススポーツのバイオメカニクス」「子どもの発育発達とダンススポーツ」，東京，2014，１月.

・慶應義塾大学・読売新聞市民講座「スポーツの見方・楽しみ方」（コーディネーター），慶應義塾大学日吉キャンパス，2013年12月14日.

（役職）

・日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会委員

・横浜市スポーツ推進審議会委員

・東京体育学会常任理事

・比較舞踊学会副会長

・日本子ども学会理事

・日本体育協会「アクティブチャイルドプログラム普及啓発事業」有識者会議委員

・笹川スポーツ研究助成選考委員会委員，同選考部会長

・「子どもと発育発達」編集委員

・「International Journal of Sport and Health Science」（日本体育学会）編集委員

・日本体育学会，政策検討・諮問委員会委員

・日本レクリエーション協会「文部科学省委託　高齢者の体力つくり支援事業」，ワーキンググループ委員

（メディア出演）

・佐々木玲子，“子どもの発育と運動能力について”，Story，ラジオ日経２，2014.1.7-10

研究助成等

・“幼児の基本的動作習熟度及び活動動作水準に応じた運動プログラムのための基礎的研究”，文部科学省科学研究費助成金基盤研究（C），（25350943），120万円.

植田　史生　【教授】

学会発表等

村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ科学分野の LLLT 研究の現状”，第17回日本レーザー・スポーツ医科学学会・研究レポート（慶應義塾大学・横浜），2013.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

植田史生 “近代オリンピックを考える”

第17回日本レーザー・スポーツ医科学学会

慶應義塾大学体育研究所

平成25年12月７日

（講師）

・ハーヴァード大学剣道夏合宿講師，長崎，2013年８月

・南ドイツ剣道夏季稽古会講師，ドイツ，2013年９月

・ハーヴァード大学剣道秋季合宿講師，ハーヴァード，2013年11月

（役職）

・第17回日本レーザー・スポーツ医科学学会会長

・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事

・ハーヴァード大学剣道部ヘッドコーチ，ライフタイムデレクター

当年中の研究教育活動の概要

日本医用レーザー研究所と共同で、低反応レーザー照射による筋機能に関する研究を行いながら簡易低反応レーザーの実用化に向けて開発中である。

綿田　博人　【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

慶應義塾体育会副理事

慶應義塾体育会柔道部部長代行（９月末迄）

慶應義塾高等学校硬式野球部特別招聘コーチ

村山　光義　【教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

村山光義，近藤明彦，“「大学体育研究」の新たな視座を求めて”，慶應義塾大学体育研究所紀要，53（1）：15-23，2014.1

松橋明宏，村山光義，竹俣壽郎，長澤郁子，難波謙二，富山英明，新井新一，弓桁亮介，堀川浩之，“異なる筋硬度計による下腿部の筋硬度評価 “，人間科学研究，11：99-106，2014.3

学会発表等

Murayama M, Kuwada K, Uchiyama T, Yoneda T, “Individual muscle thickness and posture should be considered while evaluating a standard value for muscle hardness” 18th Annual congress of the European College of Sport Science, Barcelona（Spain）, Book of abstracts P820, 2013.7

村山光義，米田継武，“押圧型筋硬度計測を再考する”，第68回日本体力医学会（東京），体力科学62（6）：P643，2013.9

村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ科学分野の LLLT 研究の現状”，第17回日本レーザー・スポーツ医科学学会・研究レポート（慶應義塾大学・横浜），2013.12

村山光義，村松憲，野口和行，東海林祐子，“大学体育実技が学生の自己効力感・社会的スキルに及ぼす効果について”，第 2 回大学体育研究フォーラム（武蔵野美術大学・東京），抄録集 P17，2014.2

東海林祐子，永野智久，加藤貴昭，村山光義，野口和行，村松憲，“大学体育における必修授業と選択授業の比較から見たライフスキル獲得の実態の検討”，第 2 回大学体育研究フォーラム（武蔵野美術大学・東京），抄録集 P15，2014.2

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

村山光義，“慶應義塾通信教育課程　長野慶友会講演 「社会とスポーツ・遊び文化の関係を考える ～ 2020 東京オリンピック開催決定の折に～」”，長野市，2013.10

（役職）

・慶應義塾大学日吉キャンパス　Hiyoshi Reaserch Portfolio 実行委員
・公益社団法人全国大学体育連合理事（総務部長）
・日本レーザー・スポーツ医科学学会　事務局代表
・一般社団法人日本バイアスロン連盟　科学委員
・日本オリンピック委員会強化スタッフ

研究助成等

“筋損傷後の筋硬度と elastography 法による筋弾性特性の関係”，文部科学省科学研究費（基盤研究（C）），（課題番号：25350822），100万円

当年中の研究教育活動の概要

当年は、体育研究所内「基盤研究」の成果レポート発行を研究委員長として推進した。また、新たに文部科学省科学研究費を取得し、従来からの筋硬度研究を進展させるためオーストラリアの Edith Cowan University における共同研究に着手した。

山内　　賢　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（執筆）

・山内　賢，「健康寿命を考える「歩く処方箋」～不老不死の薬はみあたりませんが、遅老遅死の薬はありそうです～」，Walking PLUS vol 5，一般社団法人日本ポールウォーキング協会：p2－4，2013年.
・山内　賢，「学会報告レポート：高齢者を対象とするポールウォーキングによる運動処方の事例とその効果～自覚できる変化と歩行運動機能向上の可能性」，Walking PLUS vol 5，一般社団法人日本ポールウォーキング協会：p10－11，2013年.
・山内　賢，「目指せ！ポールを手にしたウォー KING（ウォーキング）～技術・技能・技量は日進月歩、老若男女が学べる「上手さ」の法則～」，Walking PLUS vol 6，一般社団法人日本ポールウォーキング協会：p5－7，2013年.
・山内　賢，「学会報告レポート：ポールウォーキングにおける運動強度と気分尺度の動態～高齢者を対象としたポールウォーキングの勧めと運動処方～，高齢者が行うポールウォーキングの至適運動強度について～気分尺度からの考察～，介護予防に役立つポールウォーキングの運動処方について～気分尺度と体力に合わせた至適運動強度を探る～」，Walking PLUS vol 6，一般社団法人日本ポールウォーキング協会：p8－9，2013年.

学会発表等

・山内　賢　近藤明彦　小牧久見子　丸田　巖　市河　勉，日本体育学会第64回大会，ポール・ウォーキングにおける運動強度と気分尺度の動態～高齢者を対象としたポール・ウォーキングの勧めと運動処方～，立命館大学びわこ・くさつキャンパス（滋賀県）：予稿集 p409，2013年８月．

・山内　賢　杉浦伸郎　内山映子　市河　勉，高齢者が行うポールウォーキングの至適運動強度について～気分尺度からの考察～，第72回日本公衆衛生学会総会，三重県総合文化センター（三重県）：日本公衆衛生雑誌 vol.60, No.10 学会総会抄録集 p586，2013年９月．

・山内　賢　ラウ優紀子，介護予防に役立つポールウォーキングの運動処方について～気分尺度と体力にあわせた至適運動強度を探る～，第33回日本看護科学学会学術集会，大阪国際会議場（大阪府）：講演集 p602，2013年12月．

・田村浩志　市河　勉　柳川郁生　杉浦伸郎　山内　賢，二画面フィードバックシステムを用いた運動指導の事例と効果－その１－，第68回日本体力医学会大会．日本教育会館学術総合センター（東京都）：予稿集 p231，体力科学 vol.62，No.6 p617，2013年９月．

・杉浦　伸郎　山内　賢　安藤　邦彦，高齢者を対象とするポールウォーキングによる運動処方の事例とその効果～自覚できる変化と歩行運動機能向上の可能性～，第25回日本運動器学会，神戸国際会議場（兵庫県）：学会抄録集 p195，2013年７月．

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

・山内　賢，“一般社団法人日本ポールウォーキング協会リーダーズ CAMP in 福島”，「ポールウォーキングを普及するためには…魅せることから創めましょう！世界ポール歩き日本ポール歩き地元ポール歩き」，福島県伊達市月舘「つきだて花工房」，2013年９月14日．

・山内　賢，“一般社団法人日本ポールウォーキング協会チェンジウォーカーズサミット in 福島（月舘）”，「ポールウォーキングとノルディックウォーキング比較考察」・「ポールウォーキングにおける運動強度と気分尺度の動態」・「高齢者を対象としたポールウォーキング運動処方」，福島県伊達市月舘「つきだて花工房」，2013年９月15日．

・山内　賢，“大阪市立大学文化交流センター公開講座「今、そこにある危機 －我々はどうのり越える？－ part２”」，「転ばぬ先の知恵（杖）にポールウォーキングはいかがでしょうか？－歩く処方箋－」，大阪市立大学文化交流センター，2013年10月11日．

（講師派遣）

・山内　賢，第１回日本スポーツ健康科学学会「設立記念シンポジウム」，「ポールウォーキングが健康寿命を助長する至適運動強度」，東京農業大学世田谷キャンパス新講義棟141教室，2013年８月７日．

・山内　賢，社会福祉法人聖隷福祉事業団「ポールウォーキング体験会」，「正しいポールウォーキングの歩行」，聖隷藤沢ウェルフェアタウン，2013年10月18日．

・山内　賢，「Life Support Mirror に関する技術指導」，「『まねび』の運動学とコーチング～みる（見る、観る、視る、診、看る、やってみる）を開発する～」，キャノン株式会社本社内，2013年11月15日．

（フィールドワーク等の研究教育活動および役職）

大学体育連合 FD 推進部委員　通年

当年中の研究教育活動の概要

世論調査（平成25年調査）によると、国民の８割は年間に何らかの運動やスポーツを実施しているようであるが、運動不足を感じると意識している者は７割程度となる。このような状況の中で、厚生労働省は、運動不足が生活習慣病の発症リスクの一要因であることを示すとともに、身体活動の目標項目のひとつとして「日常生活における歩数の増加（1,200～1,500 歩増）」を掲げている。そこで山内は、「歩行を運動不足の目安として健康の維持・増進をモニタリングする」ことを妥当な考え方とし、ただ歩くだけでなく、個人の能力に合わせて運動負荷設定する方法として、カルボーネン法とボルグスケールによる関数近似より、至適運動強度を設定する提案を学会で発表した。さらに歩行運動は姿勢の矯正に貢献するという仮説をたて、ウォーキングの動作を比較する映像再生ソフトや安価な家庭用および防犯用カメラとマイクロソフト社の Kinect

を応用した姿勢観察と運動評価システムの開発にも挑戦した。Kinect の活用は、特別な測定装置を身に着けない非接触型の身体活動情報収集機能により、自然な運動動作の情報を手軽に遠隔で観察・記録する環境を可能にしてくれた。山内は「身近な ITC 技術を活用した運動動作観察」をキャッチコピーとして、「簡便に収集できる映像情報をマルチユースして如何に現場にフィードバックすればよいのかを探るコーチング」を積極的に創造・追求していく。

吉田　泰将　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（執筆）

・吉田泰将ほか 9 名，“安全で効果的な剣道授業の展開（ダイジェスト版”，一般財団法人全日本剣道連盟，プリ・テック印刷：2013.

・吉田泰将，“実践に活きるメンタル強化策－「いつも同じ」であるために”，月刊剣道日本，スキージャーナル（株）：84-87，2014.1

学会発表等

・池田孝博，吉田泰将ほか 9 名，“集成材の剣道場床における機能性評価の因子構造と床面の特性”，日本武道学会，筑波大学，2013.9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（役職）

・日本武道学会　評議員　通年

・一般財団法人全日本学校剣道連盟　常任理事　通年

・第55回全国教職員剣道大会（和歌山大会）総務委員長

・公益財団法人日本武道館・一般財団法人全日本剣道連盟・一般財団法人全日本学校剣道連盟主催　全国学校剣道指導者研修会　講師（北信越ブロック・九州ブロック）

・一般財団法人全日本剣道連盟　社会体育指導員委員会　委員　講習会　講師　通年

・文部科学省委託事業　武道等指導支援強化委員会　委員　中央講習会　講師（10月～）

・全日本学生剣道連盟・関東学生剣道連盟主催大会　審判員　通年

・全日本学連剣友会　事務局長　通年

・関東学連剣友連合会　理事長　通年

・東京学連剣友連合会　理事　通年

・慶應義塾体育会剣道部　師範　三田剣友会　副師範　通年

・慶應義塾大学医学部体育会剣道部　師範代行　通年

（資格）

・一般財団法人　全日本剣道連盟　剣道教士八段

（大会出場）

・寛仁親王杯　第13回剣道八段選抜大会（ 4 年連続出場）

当年中の研究教育活動の概要

スポーツ技術向上に寄与する指導プログラムの開発を課題として、加速度センサを用いた剣道竹刀の素振りスピード評価システムと映像の即時フィードバックによる技術指導の効果について検討を行い、体育実技・剣道の授業や体育会剣道部の指導に活用している。

加藤　大仁　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

加藤大仁　“なぜ国がスポーツを振興・助成するのか”　経済セミナー #671 2013年 4・5 月号　pp.50-56

学会発表等

加藤大仁　“スポーツの公共性、スポーツの政治性:国がスポーツを振興・助成する理由を考える”　日本運動・スポーツ科学学会第20回大会　2013年６月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

・加藤大仁　日本体育協会公認スポーツ指導員養成講習会講師（依頼元 埼玉県バスケットボール協会）2013年11月17日

・加藤大仁　日本バスケットボール協会公認 E−1 級コーチ養成講習会講師（依頼元 埼玉県バスケットボール協会）　2014年３月１日

（その他）

日本バスケットボール協会テクニカル委員会コーチコミッティーグループメンバー

板垣　悦子　【准教授】

塾内派遣留学中（アメリカ合衆国　カリフォルニア州立サンノゼ大学）

当年中の研究教育活動の概要

昨年度に引き続き運動学部に所属し、研究テーマ「カリフォルニア州立サンノゼ大学におけるヘルスプロモーションの実態」とし、健康に関わる部署（健康情報を発信している学生健康センター・各種スポーツ講座を開講しているイベントセンター・運動学部）が学生へのヘルスプロモーションについて、どのような役割を持ち連携しているのか実態調査した。

また昨年度受講した健康に関連する授業（ヨガ・太極拳・ピラティス・エアロビクス・フィットネスウォーキング・ウエイトトレーニング）の中から、ピラティスに焦点を当て全授業のアシスタントをさせて頂きながらピラティスの基本、応用、指導法等を学んだ。

研究テーマ「授業ジャーナルから探るピラティスの効果」とし、ピラティス授業から得られる身体的および心理的な効果を言葉の変化から検討するために、毎回の授業終了時に受講学生に感想を記述してもらいデータを収集した。

加藤　幸司　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

・平成25年度　財団法人日本体育協会公認コーチ専門科目（後期）講習会（バドミントン），茨城，2014年１月

・早稲田大学オープン教育センター講師（非常勤），通年

（役職）

・慶應義塾体育会バドミントン部女子監督

須田　芳正　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）

・松山博明，土屋裕睦，堀野博幸，須田芳正，“海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題”，大阪体育学研究，52：15−22，2014.1.

・今川正浩，須田芳正，他 “2012年度関東大学サッカーリーグ戦における得点傾向” 東海大学紀要体育学部，43：2014.1.

（執筆）

・須田芳正＋松崎康弘 “フットサル教本改訂版”，大修館書店，2013.10.

学会発表等

・梅田孝，須田芳正　他“大学サッカー選手により実施された強化とテーパリングが筋疲労及び免疫機能に及ぼす影響について”，第17回日本スポーツ・レーザー医科学学会，（慶應義塾大学・横浜），2013.12.

・村山光義，石手靖，植田史生，須田芳正，“スポーツ科学分野の LLLT 研究の現状”，第17回日本レーザー・スポーツ医科学学会・研究レポート（慶應義塾大学・横浜），2013.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）

・慶應義塾幼稚舎体育特別講師，2013.12.

・早稲田大学オープン教育センター講師（非常勤），通年

（役職）

・慶應義塾大学体育会ソッカー部監督

野口　和行　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

（執筆）

・野口和行，“ユニバーサル社会実現のために―障がいのある人たちと共に楽しむ自然体験活動を通して”，野外教育情報，日本教育科学研究所：pp66-75，2014.

学会発表等

村山光義，村松憲，野口和行，東海林祐子，“大学体育実技が学生の自己効力感・社会的スキルに及ぼす効果について”，第 2 回大学体育研究フォーラム（武蔵野美術大学・東京），抄録集 P17，2014.2

東海林祐子，永野智久，加藤貴昭，村山光義，野口和行，村松憲，“大学体育における必修授業と選択授業の比較から見たライフスキル獲得の実態の検討”，第 2 回大学体育研究フォーラム（武蔵野美術大学・東京），抄録集 P15，2014.2

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）

・野口和行，“Special Needs Camp の意義”，キャンプ指導者のためのリベラルアーツ2013，国立オリンピック記念青少年総合センター，2014年 2 月.

（講師）

・野口和行，“アウトドアゲームの指導”，アウトドアゲーム指導法講習会，国立那須甲子青少年自然の家，2013年10月.

・野口和行，“自然体験活動の指導”，自然体験活動指導者養成講習，国立赤城青少年交流の家，2013年11月.

村松　　憲　【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

学会発表等

・村松　憲，高橋仁大（鹿屋体育大学），梅林　薫（大阪体育大学），“世界トップレベルテニス選手のサービスにおける、スピードと回転量について”，第25回テニス学会，日本大学文理学部（東京都），2013年12月

・村山光義，村松憲，野口和行，東海林祐子，“大学体育実技が学生の自己効力感・社会的スキルに及ぼす効果について”，第 2 回大学体育研究フォーラム（武蔵野美術大学・東京），抄録集 P17，2014.2

・東海林祐子，永野智久，加藤貴昭，村山光義，野口和行，村松憲，“大学体育における必修授業と選択授業の比較から見たライフスキル獲得の実態の検討”，第 2 回大学体育研究フォーラム（武蔵野美術大学・東京），抄録集 P15，2014.2

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（役職）

・公益財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ（情報・戦略スタッフ），通年

・公益財団法人日本テニス協会　医・科学委員会委員，通年
・日本テニス学会運営委員（審査担当兼編集委員），通年

当年中の研究教育活動の概要

前年度に引き続き、世界トップレベルテニスにおけるボールの回転量とボール速度の関係について検討を加え、学会発表した。また「楽しむ」ことを最大の目標に置いているテニス実技授業において、前年度に引き続いて「感謝できることをみつける」という実習を毎回行った。更に、体育実技授業がライフスキルにどのような影響を与えるのか、検討を始めた。

鳥海　　崇　【専任講師】

学会発表等

・T.Toriumi, “Effects on using movies to swimming class for junior high school students”, International Academic Conference on Education, Teaching and E-learning, Prague, February 28-29, 2014
・T.Toriumi, “Japanese Water Safe Education For Elementary School Students”, International Journal of Arts & Sciences conference for academic disciplines, Malta, March 2-6, 2014

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）
・鳥海崇，“館山遠泳合宿講師”，千葉県館山市見物海岸，７月21日～25日.

研究助成等

公益財団法人横浜学術教育振興財団海外渡航費助成，20万円.

奥山　静代　【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

（その他）
・加賀谷淳子，奥山静代，中村芙美子，村岡慈歩 “血流アップの「自転車体操」” 血管力を上げる健康法. NHK ためしてガッテン，主婦と生活者：48頁，2013年.
・加賀谷淳子，奥山静代，中村芙美子 “しなやかな股関節が好循環を生む” 楽エクササイズ. NHK ためしてガッテン　臨時増刊，主婦と生活者：18-19頁，2014年.
・村山光義，植田史生，奥山静代，佐藤正伸 “大学体育の教育理念とカリキュラム「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」” 慶應義塾大学体育研究所　平成25年度基盤研究レポート. ６-７頁，2014年,

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・健康・スポーツ科学女性研究者ネットワーク（NeWS）世話人

研究助成等

・奥山静代 “体育実技履修者における身体活動量に関する研究”，平成25年度学事振興資金，20万円.

坂井　利彰　【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）
・坂井利彰, “世界における男子プロテニス界の構造と日本人選手の強化策” 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士論文，2014年３月

（執筆）
・坂井利彰，“プロ選手経験がなくても活躍している海外の指導者” 日本文化出版・テニスクラシックブレーク, 2013年６月

・坂井利彰，“プロで稼げるボーダーラインは160位！”日本文化出版・テニスクラシックブレーク，2013年９月
・坂井利彰，“ダブルス強化を取り巻く環境”日本文化出版・テニスクラシックブレーク，2013年11月
・坂井利彰，“チャレンジャー大会が選手を育てる”日本ビジネスプレス，2013年12月
・坂井利彰，“慶應チャレンジャー出場の選手たちから学んだこと”日本ビジネスプレス，2014年３月
・坂井利彰，“世界へ通じる日本なりの『やり方』の模索”日本文化出版・テニスクラシックブレーク，2013年２月
・坂井利彰，“サポート体制が整った欧州のテニス環境”日本文化出版・テニスクラシックブレーク，2013年３月
・坂井利彰，“日本テニス躍進を支える『早熟と晩成』”スポーツナビ，2014年１月

（著書）
・坂井利彰，“日本人のテニスは25歳過ぎから一番強くなる”東邦出版，2014年１月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）
・公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団・こどもの体力・基礎運動能力向上事業・世田谷区ジュニアアカデミー（テニス）総合監修及び講師

（講演）
・慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座『トップアスリートの身体』，2013年11月
・公益財団法人日本プロテニス協会資質向上セミナー『大学テニス・国際テニス大会開催』，2013年11月

（役職）
・慶應義塾大学体育会庭球部監督
・慶應チャレンジャー国際テニストーナメント（慶應義塾主催）トーナメントディレクター
・公益財団法人日本プロテニス協会　理事（国際委員会副委員長）

当年中の研究教育活動の概要

・慶應義塾大学　大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了　博士（政策・メディア）

森下　愛子　【助教（有期）】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講師）
・森下愛子，“館山遠泳合宿講師”，千葉県館山市見物海岸，７月21日～25日.
・森下愛子，“体育実技 水泳”，集中講義，学校法人洗足学園音楽大学，８月25日～28日.

永田　直也　【助教（有期）】

著書・論文・執筆・報告書

（論文）
・永田直也，“大学教養体育におけるプリ・パフォーマンス・ルーティンの技能練習への活用の検討”，慶應義塾大学体育研究所紀要，53：11-14，2014.

学会発表等

・Naoya Nagata, “Effects of a pre-performance routine on basketball free-throw training in college physical education”, 18th Annual Congress of the European College of Sport Science, Barcelona, 2013年６月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

（講演）
・“トップアスリートの心の中はどうなっているのか？～大舞台で実力を発揮する秘訣を探る～”，慶應義塾大学・読売新聞社　市民講座「スポーツの見方・楽しみ方」，慶應義塾大学日吉キャンパス，2013年12月.

（講師）

・慶應義塾大学学生総合センター主催第28回「スキーとスノーボードの集い」講師，新潟県両講師赤倉リゾートスキー場，2014年２月.

（フィールドワーク）

・公益財団法人日本障害者スポーツ協会日本パラリンピック委員会　平成25年度障害者競技スポーツ医・科学・情報サポート推進事業競技団体サポートスタッフ（心理サポート），通年.

研究助成等

・“バスケットボール初級者に対するプリ・パフォーマンス・ルーティン学習の影響”，平成25年度慶應義塾学事振興資金，300千円.

当年中の研究教育活動の概要

当年は、体育研究所での研究教育活動２年目であった。

研究活動は、「プリ・パフォーマンス・ルーティン（PPR）」をテーマに、課題初級者における PPR 学習の影響を、課題動作ならびにボール軌道から検討した。この個人研究に加え、基盤研究コアテーマ①「FD 実践としての体育授業プログラムの在り方」の２班に所属し、大学体育における動機づけ雰囲気と動機づけの関連の検討を行った。今後は、個人・共同研究ともに研究を進め、成果として発表できるようにしていく。

教育活動は、授業のみならず様々なイベントにおいて塾生の活動に携わった。２年目ということもあり、ゆとりを持って、意図的な関わり方ができたように感じる。次年度は、塾生の技術指導と社会性の構築と、両面にわたって効果的な指導を実施していきたい。

２．所内定例研究会発表会要旨

第１回　４月30日

鳥海　崇

塾生に対する体力テストの実施と結果の利用法について

本発表では以下の２点について報告した。

①これまで体育研究所で実施してきた体力テストのテスト項目の変遷や体力テストの結果からわかる塾生の体力動向について紹介し、それらを勘案して今後体育研究所が実施していくべき体力測定の項目や測定する機会について紹介した。

②これら体力テストの結果の利用法として、これまでも用いられてきた被験者の体力レベルの把握はもちろんのこと、それに加えて体力テストの結果を大学生活における競技上のタレント識別・育成プログラムへ利用していくことについて紹介した。英国や豪州でのタレント識別・育成プログラムの現状とロンドン五輪における結果を報告するとともに、我が国における同プログラムの現状について、福岡県を例にして紹介した。これらの結果から、慶應義塾としても体力テストの結果をタレント識別のひとつの指標として用いる点について提案した。

発表後は活発な質疑が実施された。具体的な質問は以下の通りである。

Ｑ１．体力テストは体育会が扱っている競技のみを想定しているのか。

Ａ１．タレント識別ができるのであれば体育会にこだわる必要はない。

Ｑ２．タレント識別するには体力テストの項目では少ないのではないか。

Ａ２．体力テストはタレント識別のための第一歩と考えていただきたい。

第２回　５月28日

坂井　利彰

国際競技大会を通して考える競技力向上戦略

◆平成24年度日本スポーツ振興センター主催地域・体育系大学ネットワーク全国会議における内容の報告。

①国際競技大会を通して考える競技力向上戦略
～オリンピック競技大会の取組を通して～

②地域タレント発掘・育成事業との連携ネットワークの現状

◆スポーツ政策におけるメダルポテンシャルアスリートの考え方

◆テニスにおけるメダルポテンシャルアスリートの捉え方

日本スポーツ振興センターが地域・体育系大学ネットワーク全国会議を開催する趣旨については、スポーツ基本法及びスポーツ基本計画を推進する観点から、地方との連携を強めていくことに対する問題意識が高いことを報告。一方では、スポーツ基本法の中にスポーツ振興を進める上での大学が果たす役割が明確になっておらず、スポーツ基本計画を地方・体育系大学と進めていく上ではその点が難点となる可能性が示唆された。また、タレント発掘においてどの年齢から対象としていくのかについても考えていく必要性があることも示唆された。この度示唆された点を含めて、日本スポーツ振興センターとの情報交換を継続していき、更なる多角的な観点から研究を進めていく所存である。

（参考文献その他）

日本スポーツ振興センター
地域・体育系大学ネットワーク全国会議プログラム
2013年３月26日～28日＠味の素ナショナルトレーニングセンター

第３回　６月25日

加藤　大仁

スポーツの公共性、スポーツの政治性

2006年末に表面化したスポーツ立国に関する議論は、東京都によるオリンピック招致活動を背景に、スポーツ基本法という形に収斂していった。しかし、何故国がスポーツを振興するのか、また何を助成すべきかとの問いに対して、一義的な回答があるわけではない。

例えば経済学の場合、公共財という概念が「公共性」や「公」と「私」を論じる際のキーワードだが、スポーツが純粋な公共財であるとは言えないし、正の外部性やメリット財としての性格等、財・サービスの性格に基づいた考察を試みても、現実的には有用性のない回答しか得られない。社会科学の中では、公共性に関して最も明快な定義を与えていると考えられる経済学の概念をもってしても、スポーツが国の政策課題とされるべきか否かという点に関する明確な回答を得ることはできないのである。

実際、スポーツを政策課題として取り上げるか否か、あるいはスポーツ振興のためにどの程度の予算を配分するかといったことは、政治的な決定に委ねられている。また、通俗的な理解では政府によって供給されているものが公共財と看做されているように、スポーツの場合も政治的にその必要性が認識されることを通じて公共性が与えられているというのが実情だといえよう。

ところで、昨年の研究会でも報告したように、スポーツによる立国を目指すという議論は、オリンピック招致活動を背景に、スポーツ基本法を制定するという形に収斂していった。

スポーツ基本法に基づいて制定されたスポーツ基本計画では、「『年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること』を基本的な政策課題としつつ」、「『幸福で豊かな生活を営むことができる社会』の具体的な内容を達成するため」、「スポーツの推進に取り組み、スポーツ立国の実現を目指すこととする」としている。

しかし、スポーツ基本法の条文をみると、優秀なスポーツ選手の育成（第25条）や国際競技会の招致・支援（第27条）を国の義務としているのに対し、スポーツ施設の整備（第12条）や地域スポーツ振興事業支援（第21条）といった、一般国民のスポーツ権を保障するため条項は努力義務規定とされているに過ぎない。こうした点を鑑みると、スポーツ立国論の主要な目的は、メダル獲得と五輪招致にあったといえるだろう。

となると、少なくとも現在進行形のスポーツ政策に関しては、何故メダルの獲得やオリンピック招致が目指されるのかという問いに答えない限り、スポーツが国の政策課題とされている理由は明らかにならないということになる。

ここでは詳しく論じないが、スポーツ立国論が唱えられた背景には、長期にわたる経済停滞により、政治への信頼感や経済大国としての国際的地位が低下していることへの危機感があったことは指摘しておこう。事実、2008年６月に発表された「『スポーツ立国』ニッポンを目指して～国家戦略としてのスポーツ～」では、トップアスリートの活躍によりナショナル・アイデンティティーが高まることや、国際社会でのプレゼンス向上を図ることが強調されていた。また、東京都がオリンピック招致に手を挙げた背景には、オリンピックに乗じて都市の開発・整備を行いたいとの考えがあったとの指摘もある。また、スポーツ立国が唱えられ始めた時期を考えると、新自由主義的な政策の展開によりバラバラになった個人を、新保守主義的な思想により繋ぎとめようと試みたとの解釈も成り立ちえよう。

オリンピックやFIFAワールドカップのたびに過熱する報道や、選手のプレイに一喜一

憂する人々の姿を踏まえれば、スポーツの持つ影響力には計り知れないものがある。だからこそ、時としてスポーツは政治的に重要な資源となり得るのである。

スポーツを通じた経済財政問題の解決や国民意識の高揚を掲げるスポーツ立国論に対しては、スポーツはそれ自体が楽しく、価値があるものと考える立場から、スポーツを他の政策領域のための手段に貶めるものだとの批判が提起されている。

既に述べたように、国や地方公共団体がスポーツ振興にどの程度力を入れるべきかという問いに対する、一義的な答えがあるわけではない。地域の施設・環境の整備とトップアスリートに対する支援のどちらを優先し、どの程度の予算を配分するかという問題は、ある意味価値判断に関わる問題でもあり、政治的な判断に委ねざるを得ないのである。

しかし、仮にもスポーツ権を謳うのであれば、手軽にスポーツを楽しめるような環境の整備により多くの力が注がれるべきではないだろうか。2011年11月に朝日新聞が行った調査でも明らかなように、圧倒的多数の人々が国に望んでいるのは、スポーツを楽しめる環境づくりなのである。

蓋し政策とは、その政策領域に関する歴史的経緯やその時々の社会的状況、決定に至る制度や政治家をはじめとするアクターの影響力など、様々な要素が絡み合って形成されていくものである。だが、少なくとも人々のニーズとのマッチングという観点から見た場合、現在のスポーツ政策には問題ありと言わざるを得ない。

政策を学問として科学的に論じるということは、価値の問題を単なる好みの問題として放置することなく、社会のあり方や政策の合理性を絶えず検証していく作業だといえよう。当然のことながら、スポーツ政策に関しても、こうした観点から何度も検証を繰り返すことが必要なのである。

山内　賢

PC による超鏡を用いた運動観察の試案 III ～ソフトの Prototype 完成報告～

スポーツにおける技術・技能修得の学習過程は、真似から始まり、比較して修正して、正しいものに近づけていく中で、最終的に自分らしさを築くことなのかもしれない。学習者がある運動課題を修得する上で、正しい運動を修得するためには、よいお手本を見て真似する繰り返しの学習が有効である。繰り返し学習の形態は、指導者が直接指導して学習者の課題を調整していく型と指導者がその場にいないので、遠隔的に映像や画像により課題調整を行う型が考えられる。それぞれは利点と欠点を持ち合わせており、直接指導調整型は、「繰り返し学習の途中で、指導者が現場に居る」、「学習者が指導者より細かな指導を受けられる」点が有利であり、「指導者に頼り切るので、復習がその後を左右する」という不利な点がある。また、遠隔指導調整型は、「ビデオや DVD による映像を用いた自己研修により繰り返し学習ができるので、自発性を誘発する」点が有利であり、「視聴は指導者映像と自我映像を別々に見直す時間的なロスがある」、「感覚や思い込みによる学習効果の不安（癖がつく）」という点が不利である。直接指導は学習者が熱望することであるが、常に行われるとは限らないので、研究者は遠隔指導の不利な点を補うことを模索する。

本報告は、何かの運動学習をする場合に、指導者がその場に居合わせない、遠隔的に映像を用いた学習・指導方法として有効活用する、PC ソフト開発の成功を公開するものである。PC ソフトのキャッチコピーは、「まねぶ運動動作学習」である。これは、「記憶なんて曖昧なものである」という考え方をヒントにして、「動作を観察する際の時間的短縮をねらいとした、参考映像と実際映像を同時視聴（合成映像）できる学習環境の意匠」、「映

像モニターによる運動観察学習の成果を学習カルテとして保存する学習フィードバックシステムの意匠」、「映像にドロウイング（マーキング、角度）や残像データを挿入する等、映像を加工できるようにして、動作の違いを比較しやすくする意匠」への挑戦である。このソフトは、現実映像と比較したい映像をPCプログラム上で2画面同時再生視聴して繰り返し学習できる方法が実現できるので、記憶を確信へ出来るだけ早く変える方法の創造が完成した。今後の課題は、ソフトの庶民流通への配慮である。すなわち、「高度な分析を伴う運動観察のソフトは高価で操作が難しい」というハードルがあるので、この弊害をできるだけ低くするような設計を試みることである。操作はキーボードのないフィンガータッチや音声認識によって画面操作ができるモデルが望ましいと考えられる。

第4回　7月23日

体育研究所基盤研究テーマ別グループの進捗状況

村松　憲

体育研究所プロジェクト研究（コアテーマ①－1）

自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発

体育研究所のプロジェクト研究がスタートしたが、本研究はその中の「コアテーマ①−1自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発」の中間報告である。

構成メンバーは、村山光義、板垣悦子、野口和行、村松憲、そして外部メンバーである東海林祐子氏である。

東海林氏の考案した「ライフスキルアンケート」をいくつかの体育実技授業の前半と後半に実施した。このアンケート結果を解析することで、体育実技授業がライフスキルの向上に貢献するのかどうかについて、考察することができると考えられる。

またこれまでウィークリースポーツに限定していた自己効力感、社会的スキルに関するアンケートを、シーズンスポーツにおいても実施することとした。

更に、アメリカの総合大学においても、自己効力感、社会的スキルに関するアンケートを行うことで、国際的比較を行うことも検討している。

山内　賢

（コアテーマ①－2）

大学体育における動機づけ雰囲気の検討

本発表では、基盤研究コアテーマ①「FD実践としての体育授業プログラムの在り方」の2班の研究内容「大学体育における動機づけ雰囲気の検討」を報告した。

体育実技履修者の動機づけに影響を与える動機づけ雰囲気の概念は、教員の資質向上（FD）を図る上で有用なものであると考えられる。しかし、従来の研究では、大学教育において動機づけ雰囲気は十分に検討されていない。そこで本班は、FD実践としての授業プログラム改善を目指し、動機づけ雰囲気を手がかりとしてプログラムの在り方を検討することとした。

研究計画は、下記の通りである。

平成25年度

平成25年度は、研究の第一段階として、履修者の運動・スポーツに対する動機づけの段階の測定、既存の評価尺度を用いた動機づけ雰囲気の測定を行い、大学体育授業における動機づけ雰囲気の影響を検討する。

平成26年度以降の計画

平成25年度に測定した結果を基に質問紙の検討を行い、大学体育に則した質問紙の開発を行う。質問紙の完成後、履修者の体育・スポーツに対する動機づけに有効な授業プログラム開発を目指す。

坂井　利彰

（コアテーマ②）

～一般学生の体力・運動能力に関する測定データを管理分析するシステム構築～

◆研究計画（産学連携プロジェクト）

1．体育授業内に一定の体力・運動能力に関する測定を実施

2．蓄積されたデータを産学連携の下に管理・分析（データ解析会社、スポーツメーカーとの産学連携）

3．クルム伊達公子選手、スポーツメーカーとの共同研究あるいは委託研究

＊アディダス社　測定機材 miCoach による走量測定

→塾ソッカー部：10月14日早稲田戦、20日専修戦で測定予定

→塾庭球部：慶應チャレンジャー国際テニストーナメント（11月10日～ 18日）測定予定

◆専門家の講師招聘

1．日本サッカー協会におけるフィジカルフィットネスレーティングの実例
　馬渕浩幸（CLIMB Factory 代表取締役）

村山　光義

（コアテーマ③）

大学体育の教育理念とカリキュラム

「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」

本テーマ班のねらいは、現在、様々に語られている大学教育を取り巻く課題を系統的にまとめ、大学体育への課題として検証するとともに、慶應義塾の実情との関係にも考察を加え、今後の諸策を検討することである。例えば、大学教育に対する社会的要請として、大学質保障・カリキュラム等があり、これに対し体育・スポーツ系大学学長会議の提案や全国大学体育連合・関連団体の提言など、体育の教育内容の検討が示されている。また、学内・大学内の課題として、初年次教育としてのプログラム、カリキュラム内の具体的枠組みも課題である。さらに、社会的貢献としてスポーツ基本法・基本計画への対応や地域総合型スポーツクラブとの関係の模索なども大学に投げかけられている。

我が班はこうした状況に向き合い、まず関連文献・書籍の洗い出し、文献レビューから課題の分類、テーマ抽出を行うこととした。現在それを進行中であるが、概略的に以下の３つの次元のテーマが見えてきた。① 大学という視点（社会情勢とグローバル化・大学比較（日本と海外の大学）・歴史的変化）。② 体育という視点（大学体育の課題・体育とは何か）。③ スポーツという視点（スポーツの課題）。その中で ① の文献考証として、岩波書店のシリーズ大学、第１巻「グローバリゼーション，社会変動と大学」2013.3.14 発刊より、「グローバリゼーションと大学」（吉田文著）、「日本の大学とグローバリゼーション」（広田照幸著）について、概略を解説した。すなわち、グローバリゼーションによる商品化・標準化・評価といった大学の変容の経緯と現状を踏まえながら、短期的視野を長期的視野に拡大する必要がある。大学を現在的価値のみで評価してはならず、大学の固有の機能は、次世代の育成、次世代への学問の継承であることを考慮すべきである。また、グローバリゼーションは現実であると同時にイデオロギーでもある。そこで、旧来の望ましい大学像と新米のネオリベラルなそれとの対立が生じている。古い理念を鍛え直し、別のグローバリゼーションの可能性、マス化ユニバーサル化の学生の変化への配慮等への課題解決をする新しい理念哲学を作り出さねばならない。

今後は、この文献レビューを深めるとともに、調査・討論を進めたい。

第 5 回　10月29日

村山　光義

押圧式筋硬度計測を再考する

【緒言】 筋硬度評価は筋コンディショニング指標として活用が期待され簡便な押圧型筋硬度計が開発されている。しかし、簡便装置は測定感度等に疑問もある。本研究は押圧型筋硬度計測において大型装置と簡便装置を比較し、その特徴・制約・装置間の対応関係等を再検討した。

【方法】 筋硬度計：大型装置としてTK-HS100（特殊計測）を可動ステージで制御する筆者らの計測システム（TK）と簡便型の PEK-1（井元製作所：PK）、NEUTONE TDM-Z1（トライオール：NT）、デジタル筋肉硬度計 M123K NT-5（シロ産業：MK）を用いた。モデル実験：生体を模倣した硬さファントム（OST 社製 Y15, Y30, Y50）に皮革等を重ね、生体の層構造を設定し硬度計測を行った。生体筋硬度計測：被験者12名で腓腹筋内側、前脛骨筋を計測点に設定。その内 3 名は腓腹筋、大腿直筋、外側広筋、半膜様筋、上腕二頭筋も計測した。各部位とも超音波診断装置（Aloka：SSD-900）で皮下組織厚・筋厚を計測した。

【結果と考察】 モデル実験ではファントムに皮革を重ねると硬度が増加しかつ押圧応答が非線形になった。Y15を皮下組織と見なし皮革と Y30（Y50）の間に重ねた場合、PK, MK では Y15＋Y30でも Y15の硬度に近かった。一方TKによる下層硬度は過大評価となった。つまり、皮膚・皮下組織が下層の筋硬度計測値に影響し、押圧量が小さい場合は上層組織の硬度が支配的となると考えられた。生体計測では、前脛骨筋は簡便装置でも比較的高い値が得られたが、その他の筋では計測値が小さくばらつきが大きかった。さらに、TK の筋硬度値と簡便装置の計測値には対応関係が示されなかった。簡便装置は下層の硬度が高い方が高感度となり、変形しにくい、または骨までの距離が短い等の筋に適用できる可能性があるが、皮下組織量や部位の大きさなどを考慮し、慎重に取り扱う必要があると考えられた。

備考：本研究は平成24年度所内研究費（浅野基金研究）の補助を受けて行った。また、本発表内容の一部は第62回日本体力医学会において発表した（H25.9.23）。

第 6 回　11月26日

株式会社 CLIMB Factory

代表取締役社長　馬渕　浩幸

データ分析における、スポーツの社会貢献と可能性

◆現在、基盤研究 2 班においては、一般学生の体力・運動能力に関する測定データを蓄積し、企業との産学連携により管理分析するシステムを構築することを目的としており、CLIMB Factory 社と連携してアディダスの Micoach を活用した競技におけるデータ管理分析を行っている。この度、株式会社 CLIMB Factory の馬渕浩幸代表取締役社長をお招きし、データ分析における、スポーツの社会貢献と可能性について、ご講演を頂いた。特に、日本サッカー協会におけるフィジカルフィットネスレーティングの実例なども交えて、基盤研究 2 班として連携できる様々な可能性について示唆頂いた。体育会選手のデータ測定については公式試合や練習試合においてデータ測定を実施し、一般学生に対してはフィジカルフィットネステストを実施し、塾主催の慶應チャレンジャー国際テニストーナメントでは出場選手の試合データを測定するなど連携の可能性を示唆して頂いた。

◆講演者の略歴

略歴：

CLIMB Factory 代表取締役

馬渕浩幸（まぶちひろゆき）

生年月日：1975年 4 月23日

学 歴：1994年　保 善 高 校 卒 業 （1991年～1993年　オーストリアザルツブルグに留学）

1999年　帝京大学文学部国際文化学科卒業

職歴：

米国金融会社を経て、2001年、ドイツのマーケティング・リサーチ会社日本法人に入社。国内外の製造業、家電事業、自動車産業等の企業向けマーケティング、リサーチ業務を担当。

2007年　振動マシーン“パワープレート”日本総代理店プロティア・ジャパン入社パワープレート事業部マーケティングマネージャーに就任

2009年　スポーツマーケティング・マネジメント会社 CLIMB Factory 株式会社を設立代表取締役として現在に至る

CLIMB Factory 事業概要：

・スポーツに特化したビッグデータの収集、分析を行う専門集団
・データの取得から、統計解析、解決策の具現化まで、一連のソリューションを提供
・IT を駆使して、その実現に取り組む

備考（参考文献その他）

日本スポーツ振興センター
地域・体育系大学ネットワーク全国会議プログラム
2013年 3 月26日～28日＠味の素ナショナルトレーニングセンター

第 7 回　12月24日

近藤　明彦

Safe from Harm Program について

各種スポーツの現場で発生する暴力問題について文部科学省も「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）」を設定し「私たちは未来から「スポーツ」を託されている ―新しい時代にふさわしいコーチング―」という報告書を公表し、暴力問題の所在とそれに対する対処方法としての「コーチング推進コンソーシアム（仮称）」の設立の提言などを行った。しかしながら、従来から問題となっている暴力やいじめについての具体的事例やそのような事態に対する対処法については言及されていないのが現状である。

まず始めに日本が「児童の権利に関する条約」批准にいたるまでのプロセスを概覧するとともに、文部科学省が本条約の批准の通知の際に関係機関へ出した通知書などを確認することにより「いじめ」や「体罰」の問題が中々解決できていない現状を確認した。

そして今回の研究会では WOSM（World Organization of Scout Movement）におけるこれらの問題に対する対応についてその概要を紹介することとした。

WOSM は1990年パリの世界会議において各国連盟に対し「国連決議「子どもの権利条約」についてすべての指導者への理解を進め、国家に対しこの条約を批准するための努力をすること、また成人や子供たちにも啓蒙すること」との決議を行なった。そして2002年ギリシャ、テサロニキで行われた第36回世界スカウト会議において“Keeping Scouts Safe From Harm”を採択した。2007年に英国で開催された21WSJ では、チャイルド・プロテクションの教育プログラムが実施された。2011年にスウェーデンで開催された22WSJ においてはセーフ・フローム・ハームの教育プログラムが実施された。また2011年の22WSJ において“Keeping Children Safe From Harm”のカンファレンスが開催されこの問題の重要性が再確認されるとともに、21WSJ と22WSJ において用いられた e-learning のシステムと同様なプログラムが WOSM の Web-Site において“New e-learning on Keeping Scouts Safe From Harm”として利用できるようにした。

また、この問題に対する考え方は二つあり一つは「チャイルド・プロテクション」である。これは「子供の権利条約」を基に18歳未満の青少年を対象として虐待（Abuse）として“いじめ”、“身体的虐待”、“精神的虐待”、“ネグ

レクト（無視）”、“性的虐待”、“搾取” を問題とし、虐待から子供を守ることに重点を置いている。これに対してもう一つの「セーフ・フローム・ハーム」の考え方では、虐待（Abuse）；“いじめ”、“身体的虐待”、“精神的虐待”、“ネグレクト（無視）”、“性的虐待”、“搾取” は様々な状況で起こり得るものとして、成人とスカウトの間、スカウトとスカウトの間、成人と成人の間の問題であるとしている。

「チャイルド・プロテクション」・「セーフ・フローム・ハーム」ともに、WOSM では、虐待を防ぐための教育プログラムとしての意味合いが強調されている。虐待とは何かを具体的に学ぶとともに、そのような場面に遭遇した場合どの様に対処すべきかについて学習出来るようなプログラムが提供されている。さらに虐待を発見した時の対処の仕方・虐待を防ぐための行動基準や、虐待をしたと疑われないための行動基準をも明示している点が注目される。

第 8 回　1 月31日

齋藤健司、ミン・ユンスク

大学生における学生選手の学業基準
韓国の最低学力制度について
―学校体育振興法第11条を中心に―

本発表は公開講演会として 2 名の研究者に講演いただいた。

①筑波大学の齋藤健司氏には「大学における学生選手の学業基準」という題目で講演いただいた。スポーツ基本法とその関連条文をレビューするとともに、学生選手の学業基準の設定について、米国の NCAA 規則による民間団体による自治、及び韓国の学校体育振興法による国家による法の支配について解説した。特に齋藤氏には米国 NCAA の実例を紹介いただき、日本の学生野球との比較を紹介していただいた。

②筑波大学大学院のミン・ユンスク氏には「韓国の最低学力制度について―学校体育振興法第11条を中心に―」という題目で講演いただいた。齋藤健司氏の講演内容を受けて韓国の学校体育振興法について詳報していただいた。特に学校体育振興法の制定背景と、その主要内容である最低学力制度について紹介した。

2 名の講演後は聴者との議論となった。慶應義塾の現況では学業基準の設定の必要性はあまり感じ取れないが、だからこそ他大学に与える影響が大きいという認識を持ち閉会となった。

3．慶應義塾の補助を受けた研究の報告

1）所内研究費補助研究

加藤　大仁

現代日本における政治的潮流の変化とスポーツ政策の動向

2006年の半ば以降、俄かに「スポーツ立国」に関する議論が始められ、2010年に入ると「スポーツ立国戦略」が打ち出された。その後スポーツ基本法が制定され、昨年９月には2020年夏季オリンピックの東京招致に成功した。スポーツによる立国を目指すという議論は、オリンピック招致活動を背景に、スポーツ基本法を制定するという形に収斂し、東京でのオリンピック招致まで漕ぎ着けたと言えよう。

しかし、昨年度の研究会発表でも述べたように、社会科学の中では公共性に関して最も明快な定義を与えていると考えられる経済学の概念をもってしても、スポーツが国の政策課題とされるべきか否かという点に関する明確な回答を得ることはできない。実際、スポーツを政策課題として取り上げるか否か、あるいはスポーツ振興のためにどの程度の予算を配分するかといったことは、政治的な決定に委ねられている。また、通俗的な理解では政府によって供給されているものが公共財と看做されているように、スポーツの場合も政治的にその必要性が認識されることを通じて公共性が与えられているというのが実情なのである。となれば、スポーツが政策課題となる理由を明らかにする必要がある。

ところで、キングダンの政策の窓モデルによれば、問題、政策、政治の３つの流れが合流した時に政策の窓が開き、特定の政策が選択されることになる。このモデルに沿って考えると、国際競技会での不振やスポーツ関連予算が十分に確保されていないことは広く認識されていたし、1990年代に行われたスポーツ振興くじを巡る議論を通じて、スポーツ政策に関心を持つ政治家が一定の勢力を持ち始めていたことなどを指摘することもできよう。

その一方で、スポーツ立国が初めて唱えられたのは、任期中の改憲を唱え、教育基本法の改正など、所謂新保守主義的な傾向を持つ第１次安倍政権の時代であったことには注目しておく必要がある。小泉政権時代に展開された新自由主義的な経済政策を基に考えれば、スポーツ活動自体も民間に任せるべきであり、例えトップアスリートであっても資金調達などは自ら行うべきだという方向に議論が進む可能性もあった筈である。

安倍政権発足時の状況を振り返ると、少なくとも保守的な考えを持つ政治家の間では、格差の拡大や貧困層の増加、家族や終身雇用の崩壊など、これまで社会的な統合を維持するための仕組みが緩みつつあるとの認識が共有されていたと考えられる。また、新自由主義的な政策を志向するという意味では自民党とあまり違いがない民主党との差別化を図るためにも、新保守主義的な政策を推し進めることにはそれなりの意味があったといえよう。このような思潮はスポーツ政策にも反映され、トップアスリートが活躍することを通じて、日本人としてのプライドや自信を自覚させるという考えが示された可能性は高い。

今後も引き続き、1990年代から2000年代にかけての政治的な潮流をトレースし、何故スポーツ基本法がトップアスリートや国際競技会の招致を優先する形のものとなったのか、その政治社会的な背景を探りたいと考えている。

加藤大仁　“なぜ国がスポーツを振興・助成するのか”　経済セミナー #671　2013年４・５月号　pp.50-56

加藤大仁　“スポーツの公共性、スポーツの政治性：国がスポーツを振興・助成する理由を考える”　日本運動・スポーツ科学学会第20回大会　2013年６月

山内　賢

運動学習に ICT 教育を活用する試み 2
～2つの映像を組み合わせた画像観察の効能～

人が日常的に外界からの情報を脳がインプットする割合は、圧倒的に視覚からの情報量が多く 8 割を占める。視覚情報は人の行動に大きく影響するので、同時に他の感覚がインプットされた時には、視覚情報の方が優位に働くことが解明されている。本研究は、画像（視覚）を活用した情報のフィードバックシステムを開発して ICT 教育に導入する試みであり、視覚を知覚にする学習環境つくりへの挑戦である。山内は 2 つの映像を同一画面で再生するソフトウェア（2 画面動画観察フィードバックシステム：COACH）を開発して、COACH を用いた正しい動作と間違いを比較する観察学習時の優良性と効果を第68回体力医学会大会（2013）で発表し、「単一より複数の視覚情報のほうが相違を発見しやすい」ことを検証した。COACH はソフトウェアであるので、様々なカメラやセンサ等のデバイスと組み合わせることにより、映像情報や動作観察情報をマルチユースできる可能性が考えられる。そこで、山内は視覚情報の優位性を応用して「動作が見えるか？から見える化への変遷：みる（見る 観る 視る 診る 看る やってみる）が大切」というコーチングのテーマを掲げ、Microsoft 社の Kinect センサを導入した。Kinect は赤外線プロジェクタとセンサおよび RGB 感知カメラを組み合わせることにより、距離を測ることができる画期的な発明品である。いわゆる 2 次元の映像に奥行の物理量が認知できるデバイス（カメラ）である。その他、音源位置の推定や水平面の角度が計算でき、しかも赤外線を利用しているので暗闇でも人を感知する有利な点があり、様々なアプリケーションとの組み合わせは、トレーニングやリハビリテーション分野での様々な活動評価に応用できると考えられる。これまでのセンサを用いた動作解析の方法は、センサを身体に取り付ける工程があるため、計測者の動作に関する違和感やブレにつながる拘束や制限の可能性が考えられるが、Kinect にその心配がないので、山内は COACH を改良して更なる開発の創造を試みた。COACH の改良については簡便に計測できる非接触型の学習・評価環境を理想とした。新たに加えた機能は以下に説明する。現実の世界で実現できないことをバーチャル空間で表現する試みはコンシューマーゲームの中でよく見られる。現実とバーチャルは表現や現象に実感的な距離があると思われがちであるが、近年では両方のギャップを埋める試みとする複合現実と呼ばれる考え方が生まれた。これは現実もしくは仮想の単体で表現するだけではなく、現実を仮想あるいは仮想を現実として表現する試みを両側から歩み寄ろうとする新たな発想であり、拡張現実（仮想）感への挑戦である。拡張現実感を運動に応用している例としては、任天堂の Wii リモコンやボードの出現であり、この指先だけでない体感型への変化は、視覚情報と運動実感の融合と考えられる。しかしながらアニメーションと実像を比べた身体活動のギャップの埋め合わせは未完成であり、その点を補う発想で登場したのが Microsoft 社の Kinect センサの登場である。特別なコントローラーを使用せず、自身の身体の動きをセンサが感知して自分自身の映像を映し出す Kinect は、運動そのものを視覚で確認する事が出来る特徴を有するので、リハビリテーション支援に視点を置く運動評価システムの試作を可能にした。評価内容はつま先立ちや椅子から立ち上がる動作における肩ラインを計測して身体の揺らぎやゆがみ等の動的なバランスを可視化できる。その他、スクワット時の、つま先と膝の位置関係は、膝がつま先より前に出ると色や音で警告できる。「頭部の上下移動量」、「手足の前後移動量」、「腰、膝、足の高さ」、「膝の移動軌跡や面積」は数値で確認できる。最大一

歩をメジャーなしで画面上の測定ができる。今後も山内は平面的なカメラ映像を仮想的であるが奥行を認知して立体化できる画期的なデバイスを活用して、非接触方式で行える運動動作計測環境の開発にチャレンジする。

本研究課題に関する発表

第68回日本体力医学会大会，口頭発表，予稿集 p231.：田村浩志　市河　勉　柳川郁生　杉浦伸郎　山内　賢，二画面フィードバックシステムを用いた運動指導の事例と効果－その１－.

体力科学 vol.62，No.6 p617（2013）.：田村浩志　市河　勉　柳川郁生　杉浦伸郎　山内　賢，二画面フィードバックシステムを用いた運動指導の事例と効果－その１－.

２）学事振興資金補助研究

奥山　靜代

体育実技履修者における身体活動量に関する研究

【研究目的】 近年、若年層の運動不足や生活習慣病が問題となっている。特に、身体活動の機会減少に伴う体力低下について、多くの指摘がされている。生涯体育・スポーツおよび生活習慣改善のためには、若年期から継続的かつ規則的に一定の運動量を確保することが重要である。したがって、若年層にある大学生に対して、健康への関心や体力の向上を促すことは生活習慣予防の第一歩として捉えることができる。そこで、学生を対象に日常生活における身体活動量、体力を測定し、これらをもとに、大学における体育・スポーツ指導のための基礎資料を得ること、および若年期からの継続的かつ規則的に一定の運動量を確保するように意識を高めるなど、より良い生活習慣を身に付ける一助とすることを目的とした。

【研究方法】 対象者は体育実技エアロビクスの授業を履修している女子53名とした。調査項目は、①身長・体重、血圧　②身体活動量　③最大酸素摂取量である。①の血圧は全自動血圧計（エー・アンド・ディ社製：TM2655P）を用いて測定した。②の身体活動量の測定は、対象者に24時間加速度センサを内蔵した生活習慣記録器（スズケン社製ライフコーダ）を腰部に起床してから就寝するまで７日間装着させた。データはデータ転送プログラムを介してコンピュータへ取り込み、歩行数、運動量（歩行、運動によるカロリー消費量）、総消費量（基礎代謝量、微小運動量、運動量を加算したもので、１日の総カロリー消費量）の測定データを求めた。これらの値を体育実技日、平日（講義等の授業）、休日（土，日曜日の２日間）および１週間平均（７日間）に分類し、それぞれ平均値データとして用いた。③の最大酸素摂取量は自転車エルゴメータ（Senoh 社製：Cordless Bike V）を用いて体力テストプログラムを行い、値を求めた。

【結果およびまとめ】 対象者の収縮期および拡張期血圧はそれぞれ101.5mmHg、62.1mmHgであった１週間の平均歩数は、10600±2797歩（6134～19101歩の範囲）であった。また平日と休日で歩数を比較すると、平日は9236±5992歩、休日は6339±5740歩であり、平日と休日の歩数の間には統計的に有意（$P<0.0005$）な差がみられ、平日は休日の歩数よりも高値を示した。さらに、体育実技が行われた日と、それ以外の平日の歩数を値を比較すると、体育実技が行われた日は14438±3804歩（範囲：7645～24445歩）であったのに対して、それ以外の平日の平均歩数は9865±3594歩（範囲：1988～22685歩）を示し、両者の歩数の間には有意（$P<0.0001$）な差が認められた。自転車エルゴメータで測定した推定最大酸素摂取量は平均34.6ml/kg/min^{-1}であった。１週間の平均歩数と推定最大酸素摂取量との関連をみると、$P=0.051$を示し、両者の間には統計的に有

意差はみられなかったが、平均歩数が高値を示す者は、推定最大酸素摂取量も高い値を示す傾向がみられた。以上のことをまとめると、身体活動量（歩数）は休日よりも平日の方が有意に高い値を示し、さらに、体育実技日はそれ以外の平日の身体活動量よりもさらに高い値を示したことから、体育実技は継続的かつ規則的に一定の運動量を確保する重要な時間となっていることが明らかとなった。

永田　直也

バスケットボール初級者に対するプリ・パフォーマンス・ルーティン学習の影響

本研究は、プリ・パフォーマンス・ルーティン（pre-performance routine；以下、PPR と略す）と呼ばれる運動課題の成功に関連した認知・身体的な準備方略について、この準備方略の学習がシュートパフォーマンスに与える影響を検討した。

本研究の参加者は、バスケットボール競技経験のない11名の大学生であった。本研究では、対象者のパフォーマンスを、シュート成功率とボール移動の軌跡の観点から検討を行った。ボール移動の軌跡は、３次元動作解析システムを用い、フリースローラインから0.5m 間隔でボール位置を測定した。参加者は、事前、事後のテストを含め、12回実施したフリースロー練習に参加した。まず１回目の練習において、参加者からインフォームドコンセントを得たのちに、20投の事前テストを開始した。２回目の練習では、実験群には PPR を各参加者に設定させ、20投のフリースローを実施した。３回目～11回目は、２回目で設定した PPR を用い、20投のフリースローを実施した。12回目の練習で事後テストを実施した。20投のシュート成功率は、事前・事後のテスト間において対応のある t 検定を用いて統計処理した。ボール移動の軌跡は、各地点におけるボールの位置変動を算出し、対応のある１要因分散分析を用いて統計処理した。

各テストのシュート成功率の平均は、事前テスト：40.9±18.0%、事後テスト：37.3±18.4% であった。統計処理をした結果、テスト間には有意な差が認められなかった（p=.64）。また、ボール位置変動では、フリースローラインから１m 地点と３m 地点において鉛直方向の変動係数が低下した（１m 地点：F(1.10)=6.149, p<.05, ３m 地点：F(1.10)=7.234, p<.05）

本研究では、PPR 学習の影響を、シュート成功率とホールの位置変動から検討した。PPR を加えた練習によって、ボールの位置変動が少なくなる、すなわち再現性が高くなる可能性が示された。今後は、対象群を設定することや、練習期間を延長することにより、PPR の効果をより明確なものとしていく必要がある。

4．大学体育連合中央研修会参加報告

報告者：山内賢・永田直也
期　日：平成25年８月21日（水）～ 23日（金）
会　場：愛知県蒲郡市
　　ホテル竹島および蒲郡周辺施設

(1) 研修プログラム

【第１日目】
① 特別講演
「スポーツ指導者の資質能力向上について」
② 実技研修
５種目に分かれた実技指導研修
Ⅰ－１　スナッグゴルフ
Ⅰ－２　タラソテラピー
Ⅰ－３　ノルディックウォーキング
Ⅰ－４　パラグライダー
Ⅰ－５　ボードセーリング

【第２日目】
４種目に分かれた実技指導研修
Ⅱ－１　ゴルフ
Ⅱ－２　ノルディックウォーキング
Ⅱ－３　パラグライダー
Ⅱ－４　ボードセーリング

【第３日目】
① ポスター発表
② 講演
「教養体育に望む」
③ グループディスカッション
「教養体育における新たな可能性を探る」

(2) 研修内容

１）特別講演
「スポーツ指導者の資質能力向上について」
講　師：田島博樹（文部科学省スポーツ・青少年局　スポーツ振興課スポーツ指導専門官

平成25年７月にまとめられた「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書」の解説が行われた。この報告書は、「私たちは未来から「スポーツ」を託されているという」標題からもうかがい知れるようにスポーツ指導が現在だけでなく未来に与える影響を指摘している。さらには、大学の体育・スポーツ機関が果たす使命について言及しており、大学において体育・スポーツに関わる人間としては一読すべき報告書であろう。教養体育を担う弊所としては、これまでの活動に引き続き、将来、親となるであろう学生に対してスポーツの素晴らしさ・感動を体感できる教育活動を行い、それらが未来へつながるよう働きかけていくべきだと考える。

２）講演
「教養体育に望む」
講　師：北川　薫（中京大学学長）
講　師：福永哲夫（鹿屋体育大学学長）

体育系学部を持つ両学長より、教養体育が今後求められるものについての講演が行われた。北川学長からは、「保健体育」、「健康スポーツ」といった「保健」や「健康」との組み合わせではなく、「体育・スポーツ」独自の専門性を高めることが重要であるとの提言があった。福永学長からは、体育・スポーツの地位確立のため、実践研究の方法論の確立を目指す取り組みが紹介された。両学長は、ともに「体育・スポーツ学の地位向上」について述べており、弊所としても現在推進している基盤研究を進め、体育・スポーツ学の地位向上へ貢献していく必要があるだろう。

３）グループディスカッション
「教養体育における新たな可能性を探る」

参加者全員が６グループに分かれ、テーマに沿ったディスカッションを行った。我々が

参加したグループは、「50年後の教養体育の可能性」という内容を設定し、各大学の現状を共有した上で教養体育の可能性を探った。ディスカッションの中では、健康教育、人間教育といった体育・スポーツの持つ効用が中心となり、それらを学生に学ばせるためには体育実技の必修化や他分野との共同が必要という意見があった。一方で、健康教育や人間教育は体育の専売特許ではなく、他分野においても教育しうる内容である。そこで、健康教育や人間教育に加えて、「身体を動かすことによって得られる何か」を探していく必要があるという提言もあった。

4）ノルディックウォーキング

講　師：冨岡　徹（名城大学）

講　師：山田琢也（NPO法人インサイドアウトスキークラブ コーチ）

ノルディックウォーキングは、ウォーキングエクササイズ体育研究所の体育実技及び通信教育部で導入されている実技内容のひとつである。山内は、通信教育選択講座の指導法に役立つ興味深いものとして参加した。ノルディックウォーキングの歴史は、1930年代に北欧において、オフシーズンのスキートレーニングに取り入れられた内容より始まり、その後ノルディックウォーキングは、「スキーストックを改良した二本の歩行専用ポールを使用するフィットネスウォーキング」として定義され、1997年にフィンランドで本格的に普及活動が行われるようになった。ノルディックウォーキングはウォーキングにポールを活用するので、下肢への負担を減らすことができる老若男女誰でも親しめるスポーツレクリエーションである。本研修では、「ノルディックウォーキングの正しい活用方法を学習」、「体育実技の授業におけるカリキュラム例の紹介」、「ポールを使ったコーディネーショントレーニングおよび筋力トレーニングとストレッチングの紹介と実践」、「ノルディックウォーキングは歩行姿勢や直立姿勢を矯正する可能性を秘めていることの説明と姿勢にまつわる講義」、「ウォーキングに必要な道具と熱中症対策」、「履物にまつわる講義」、「研修地周辺をノルディックウォーキングでの散歩」等を学習した。さらにオプション的な実技としては、ローラースキーを体験した。ローラースキーは、「クロスカントリースキーに一番近い夏場のトレーニング方法」として活用され、スキー板より短く、板の前後両端にタイヤが付いている専用用具にクロスカントリースキー用のブーツをセッティングして、ストックとスケーティングを同調してタイヤを転がして滑るスポーツである。この研修で体験した内容は、ウォーキングという単純な身体活動から発展させる、道具を使ったフィットネスウォーキングを体育実技の授業に導入する可能性を模索する機会となった。

5）パラグライダー

講　師：大野修司（有限会社スカイトライスクール校長＆インストラクター）

講　師：井上美奈子（有限会社スカイトライスクールインストラクター）

蒲郡周辺施設においてパラグライダーの実習に参加した。実習は、山の麓にあるなだらかな傾斜地での基本操作練習から始り、高高度における指導員とのタンデム飛行、20m高度からの単独飛行と段階を経て技能習得を目指した。パラグライダーを教養体育として実施するにはリスクが高く、また天候にも左右されるために実習時間の確保が難しくなる可能性があるため授業として取り入れることは難しい。しかし、リスクが高い種目ならではのリスクコントロール法については学ぶべきことが多く、この点については学生に還元できるであろう。

6）ポスター発表

ポスター発表には5つの演題があった。各演題3分の説明の後、演題ごとに研究内容に対するフリーディスカッションが行われた。発表演題は、下記の通りである。

① 大学ゴルフ授業における教具・教場環境の違いと受講後の学生の意識

② 指数関数でみる運動回復時の酸素摂取量と心拍数の関係

③ 体育選択化が体育への関心度や体力レベルにおよぼす影響
北星学園大学における体育実技の必修科目履修者と選択科目履修者との比較

④ 大学生における体格と音響的骨評価値を用いた骨密度の関係

⑤ ポールウォーキングをご存知ですか？
転ばぬ先の知恵（杖）としての2本のストックを用いたフィットネスウォーキングの勧め

Ⅲ．教育活動記録

（教育委員会）

Ⅲ－１．授業の実施

１．平成25度体育科目の履修者統計

本年度は、ここ数年来の履修者数の底打ちを改善すべく、体育科目を広報するパンフレット「当世塾生気質」を作成し、広く塾生に体育科目のアピールを実施した。その効果によるものかは定かではないが、体育科目全体の履修者数が7043名（前年比＋1006名）となり、大幅な履修者増となった。以下に詳細な履修者統計を示し、本年度教育活動の報告と次年度に向けた課題を挙げる。

１）体育学講義と体育学演習

平成25年度は、体育学講義９コマ（前年比同数）、体育学演習２コマ（同比－４）を開講した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ−1−1に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ−1−2に示す。履修者数の合計は体育学講義で136（前年比＋3.0%）、体育学演習で18（同比－14.3%）であった。本年度は、設置授業数、設置曜日・時限の見直しを実施したが、それによる履修者数の改善はみられなかった。次年度は、本年度の形態を保ちつつ、さらなる授業広報を行うことにより履修者増を狙う。

２）体育実技 A・B

表Ⅲ−1−3に体育実技Ａ・Ｂ（ウィークリースポーツクラス）の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ−1−4に体育実技Ａ・Ｂ（ウィークリースポーツクラス）の種目別履修状況を示す。表Ⅲ−1−4に示すように、日吉・三田・芝共立合計で7287名の申込（前年比＋22.6%）に対し、最終的に6621名の履修者（同比＋16.9%）となった。定員に対する充足率は、全体で84% となり、前年を９％程上回った。また、三田・芝共立キャンパス設置科目は、合わせた充足率が76.8% となった（三田：前年比＋12％、芝共立：同比＋５%）。すべてのキャンパスにおいて申込数・履修者数ともに増加したことは、体育科目に関する広報を実施したことにより、体育科目に対する認知度が高まったためと考えられる。次年度は、広報活動を継続することで更に認知度を高め、履修者の増加を図る。

表Ⅲ-1-1. 平成25年度
体育学講義のタイトル及び担当者

講　義　名	コマ数			履修者数
	春	秋	計	
スポーツの効用を科学的にみる（スポーツ総論）	1		1	7
スポーツ心理学の世界	1		1	32
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1		1	35
スポーツコーチング概論	1		1	13
スポーツの技と文化を探る		1	1	9
健康と運動の科学		1	1	11
現代社会とスポーツ		1	1	16
チームスポーツコーチング		1	1	9
スポーツ現場のコーチングと安全教育		1	1	4

表Ⅲ-1-2. 平成25年度
体育学演習のタイトル及び担当者

講　義　名	コマ数			履修者数
	春	秋	計	
ベーシックライフサポート（救急法の基礎）	1		1	11
テニスが強くなるために研究しよう		1	1	7

表Ⅲ-1-3. 平成25年度　体育実技Ａ・Ｂ（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種　　目
教　　授	近藤　明彦	ウォーキングエクササイズ，ジョギング，陸上競技，フィットネストレーニング
〃	佐々木玲子	エアロビクス
〃	植田　史生	剣道
〃	綿田　博人	野球，ゴルフ
〃	石手　　靖	バレーボール
〃	村山　光義	フライングディスク，ニュースポーツ，インドアスポーツ
准　教　授	山内　　賢	ハンドボール，フィットネストレーニング
〃	吉田　泰将	剣道，ソフトボール
〃	加藤　大仁	バスケットボール
〃	板垣　悦子	
〃	加藤　幸司	バドミントン
〃	須田　芳正	サッカー，フットサル
〃	野口　和行	バレーボール，ニュースポーツ
〃	村松　　憲	テニス
専任講師	鳥海　　崇	水泳，水球
〃	奥山　静代	エアロビクス，ボディメイクエクササイズ
〃	坂井　利彰	テニス
助　教(有期)	森下　愛子	水泳
〃	永田　直也	バスケットボール
非常勤講師	赤井　宏司	ソフトテニス
〃	秋武　　寛	フィットネストレーニング
〃	朝飛　　大	柔道
〃	岩崎　　陸	サッカー，フットサル
〃	岡田　雅俊	軟式野球
〃	勝又　正浩	ゴルフ
〃	金指みの利	バレエエクササイズ
〃	木林　弥生	卓球
〃	木塚　孝幸	バスケットボール
〃	久保田正美	空手
〃	河乃　建仁	気功
〃	佐藤　達也	アーチェリー
〃	坂本　純子	テニス
〃	島田桂太郎	ボクシング
〃	首藤　聡史	器械体操
〃	杉本　亮子	ボディコンディショニング（ヨガ＆ピラティス）
〃	鷲見　全弘	水泳
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	田中　雅子	エアロビクス
〃	田中由美子	フェンシング
〃	円谷　洋一	弓術
〃	冨田　　賢	サッカー
〃	藤平　信一	合氣道
〃	原　荘太郎	テニス
〃	弘　　卓三	フィットネストレーニング
〃	松山　保幸	自動車
〃	宮本　千晶	テニス
〃	森田　重貴	バスケットボール
〃	森本　美行	フットサル
〃	矢作　拓也	バレーボール

表Ⅲ-1-4. 平成25年度　体育実技Ａ・Ｂ（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科目名	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
日吉地区開設	アーチェリー	88	152	1.73	89	101%
	ウォーキングエクササイズ	120	50	0.42	65	54%
	エアロビクス	400	357	0.89	392	98%
	ゴルフ	256	315	1.23	250	98%
	サッカー	450	363	0.81	369	82%
	ジョギング	30	7	0.23	11	37%
	ソフトテニス	40	27	0.68	30	75%
	ソフトボール	96	87	0.91	79	82%
	ボディコンディショニング（ヨガ&ピラティス）	160	469	2.93	193	121%
	テニス	800	847	1.06	823	103%
	水泳	360	306	0.85	341	95%
	水球	80	47	0.59	49	61%
	ニュースポーツ	100	35	0.35	64	64%
	バスケットボール	732	647	0.88	595	81%
	バドミントン	396	555	1.40	394	99%
	バレエエクササイズ	80	142	1.78	80	100%
	バレーボール	680	439	0.65	496	73%
	ハンドボール	120	66	0.55	76	63%
	フィットネストレーニング	440	223	0.51	336	76%
	フェンシング	44	42	0.95	43	98%
	フットサル	450	422	0.94	406	90%
	フライングディスク	50	40	0.80	49	98%
	ボクシング	160	120	0.75	127	79%
	剣道	200	58	0.29	71	36%
	合氣道	60	72	1.20	61	102%
	自動車	120	285	2.38	120	100%
	柔道	120	15	0.13	20	17%
	空手	84	21	0.25	24	29%
	卓球	232	236	1.02	222	96%
	野球	60	17	0.28	24	40%
	軟式野球	60	71	1.18	60	100%
	陸上競技	40	5	0.13	5	13%
	器械体操	25	36	1.44	25	100%
	気功	120	158	1.32	128	107%
	日吉合計	7253	6732	0.93	6117	84%
三田地区開設	テニス	196	254	1.30	209	107%
	バレーボール	100	29	0.29	29	29%
	弓術	100	120	1.20	114	114%
	剣道	80	20	0.25	20	25%
	合氣道	60	46	0.77	46	77%
	三田合計	536	469	0.88	418	78%
芝共立地区開設	ボディメイクエクササイズ	40	25	0.63	25	63%
	インドアスポーツ	80	61	0.76	61	76%
	芝共立合計	120	86	0.72	86	72%
全体合計		7909	7287	0.92	6621	84%

表Ⅲ−1−5に体育実技A・B（シーズンスポーツクラス）の各種目の担当者及び履修状況を示す。平成25年度は９種目（前年比同数）を開講した。履修者数は256名（前年比－0.1％）で、充足率は67％（同比－１％）になった。シーズンスポーツ全体としては履修者が増加傾向にあるが、大幅な増減を繰り返している種目もあり、個々の種目において安定した充足率を得られていない。この点については、履修者の傾向を見定め、適切な広報をとっていく必要がある。

表Ⅲ−1−5. 平成24年度　体育実技Ａ・Ｂ（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科　目　名	担当者	定員	登録数	倍率	最　終 履修者数	充足率
春学期	8月	弓術	高橋　道雄	40	51	1.28	40	100%
		マリンスポーツアクティビティ	鷲見　全弘	25	19	0.76	22	88%
		馬術（B）	高見　幸生	32	41	1.28	32	100%
		山岳「Nature & Trail」（B）	丸　誠一郎	20	10	0.50	10	50%
		ヨット（B）	金子　隆司	25	18	0.72	19	76%
秋学期	8−9月	アウトドアレクリエーション（B）	野口　和行	50	27	0.54	29	58%
		ビーチバレー（B）	石手　靖	30	11	0.37	15	50%
	2月	スキー（B）	吉田　久男	120	59	0.49	66	55%
		スケート（B）	小山　正	40	19	0.48	23	58%
計				382	255	0.67	256	67%

２．授業評価の実施

体育研究所では、体育実技を履修した学生による授業評価を長年継続的に実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授業改善に取り組んでいる。専任教員に加え、非常勤講師（ウィークリースポーツ）においても平成23年度秋学期よりweb方式によるアンケートの回収を継続している。実技指導員（シーズンスポーツ）については春学期まではこれまで通り紙方式によるアンケートを実施し、秋学期からはweb方式で実施した。

実施に際してはこれまでと同様に、授業終了３週間前より入力可能として、回答人数を把握することにより、未実施者に対しては残りの授業で実施を促した。

以下、web方式、紙面方式ともに同一に扱い集計を行った。表Ⅲ−1−6はアンケート回答者数、表Ⅲ−1−7にはアンケート調査用紙の質問項目を示した。アンケートの各質問項目には「強くそう思う」（５点）、「そう思う」（４点）、「どちらとも言えない」（３点）、「そうは思わない」（２点）、「全くそう思わない」（１点）の５段階で回答させ、得点化して評価した。Web方式によるアンケートでは、回答の時間に制限がないため、自由記述に意見を書きやすいというメリットがあるが、回答率は紙面方式より低下しているのが現状である。引き続き、各教員が積極的にアンケートへの回答を促す努力を続けなければならない。

表Ⅲ−1−6. アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	690
秋学期ウィークリー	509
春学期講義・演習	10
秋学期講義・演習	13
シーズン	128

表Ⅲ-1-7. 授業評価アンケート質問項目

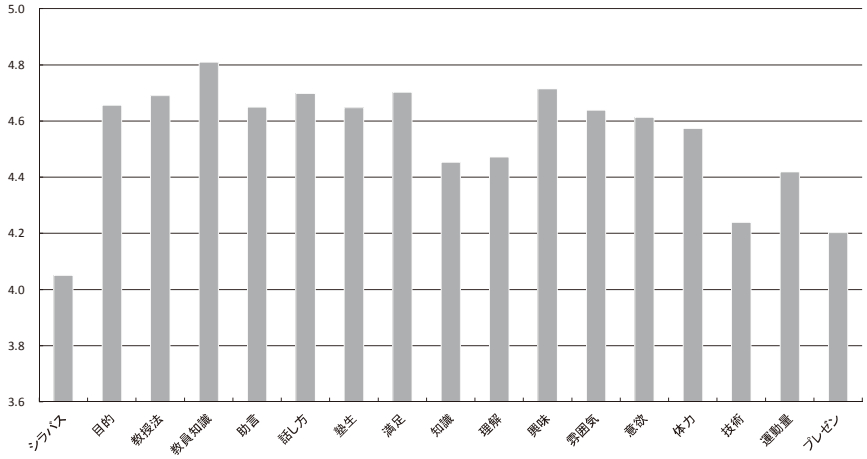
履修者全員（講義・演習・実技）回答	
設問 1	曜日時限を選択してください
設問 2	実施地区を選択してください
設問 3	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問 4	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問 5	教員の指導・教授方法は適切であった
設問 6	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問 7	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問 8	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問 9	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問10	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問11	この授業によって知識を深めることができた
設問12	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問13	この授業の内容は興味のあるものだった
設問14	このクラスの雰囲気は良好であった
設問15	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
実技履修者のみ回答	
設問16	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問17	この授業によって運動技術が向上した
設問18	運動量は適切であった
講義・演習履修者のみ回答	
設問19	配布資料やプレゼンテーションが適切であった
自由記述	
設問20	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問21	授業内容について記入してください（良かった事）
設問22	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問23	担当教員について記入してください（良かった事）
設問24	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問25	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問26	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問27	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

1）体育実技ウィークリー種目の授業評価

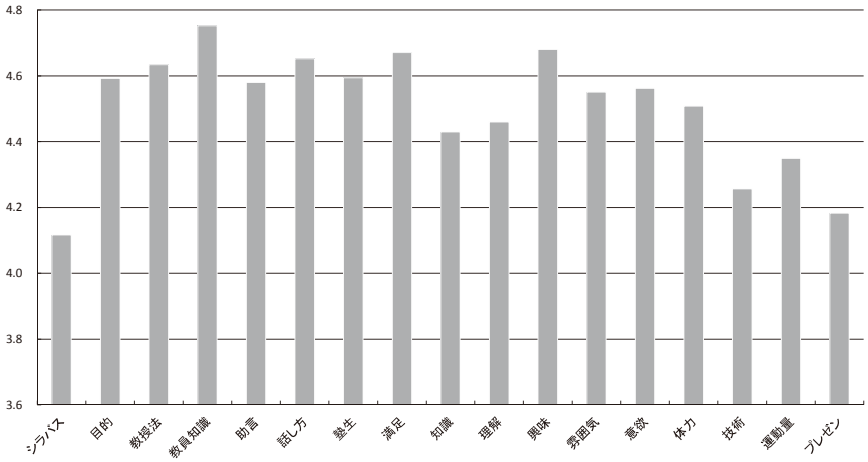
体育実技ウィークリー種目における質問項目別５段階評価（平均値±標準偏差）を図Ⅲ−1−1（春学期）、図Ⅲ−1−2（秋学期）に示した。結果をみるとほぼ例年と同様の傾向であり、以下のようにまとめられる。

春・秋の学期間に差はほとんどなく、同じ傾向が得られている。全般に４点以上の肯定的評価がほとんどであった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」（春：4.8±0.5、秋：4.7±0.5）であり、「教員の指導・教授方法は適切であった」、「教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した」等教員に対する評価に加え、「満足度」も高い値を示した。

一方、最も平均点が低いものは「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」であった（春:4.0±0.9、秋:4.0±0.9）。このことは、曜日や時限による制約から単に時間割を埋めるために履修していたり、第１希望の種目に抽選漏れした学生が他の種目を履修していたりすることが考えられる。



図Ⅲ−1−1．授業に関する質問項目別の５段階評価（春学期ウィークリー全体平均）



図Ⅲ−1−2．授業に関する質問項目別の５段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）

表Ⅲ−1−8、9には春学期・秋学期の種目別の５段階評価を示した。その結果「運動技術の向上」、「運動量の適切さ」などが低い値を示し、気功などが３点台であった。種目の違いにより運動量や技術向上の難易度は異なるため、そのことを教員が理解させながら履修者に伝え、運動量を確保する必要があると考えられる。

表Ⅲ-1-8. 種目別の5段階評価集計一覧（春学期ウィークリー）

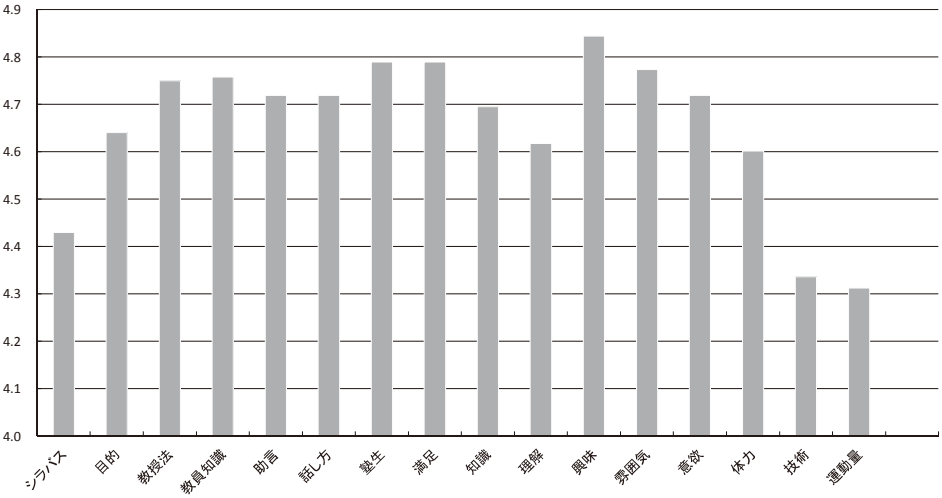
種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	2	平均	4.5	5.0	4.5	5.0	4.5	4.5	4.5	4.0	4.5	4.5	4.5	5.0	4.5	4.5	4.0	4.0
		標準偏差	0.7	0.0	0.7	0.0	0.7	0.7	0.7	1.4	0.7	0.7	0.7	0.0	0.7	0.7	0.0	1.4
合気道	15	平均	4.6	4.9	4.9	5.0	4.7	4.9	4.9	4.8	4.7	4.7	4.9	4.6	4.7	4.5	4.4	4.5
		標準偏差	0.5	0.3	0.3	0.0	0.5	0.3	0.4	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	0.7	0.5
インドアスポーツ	8	平均	4.3	4.8	4.8	4.9	4.6	4.9	4.8	4.5	4.6	4.6	4.4	4.8	4.5	4.6	4.1	4.0
		標準偏差	0.7	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.5	0.8	0.5
ウォーキングエクササイズ	0	平均																
		標準偏差																
エアロビクス	45	平均	4.0	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.7	4.8	4.4	4.5	4.7	4.7	4.6	4.6	3.7	4.4
		標準偏差	0.8	0.5	0.4	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	0.9	0.6
空手	5	平均	4.0	4.8	5.0	5.0	4.8	5.0	5.0	4.8	4.6	4.6	4.8	5.0	5.0	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	0.7	0.4	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	0.5	0.5	0.4	0.0	0.0	0.4	0.5	0.5
気功	4	平均	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	4.8	4.8	4.8	5.0	4.8	4.8	3.5	2.5	3.3
		標準偏差	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.0	0.5	0.5	0.6	0.6	1.0
弓術	14	平均	4.6	4.6	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.6	5.0	4.7	4.6	4.5	4.4	4.7
		標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4	0.4	0.6	0.0	0.5	0.6	0.7	0.8	0.5
剣道	23	平均	4.0	4.7	4.7	4.9	4.8	4.8	4.7	4.7	4.8	4.4	4.7	4.7	4.6	4.2	4.2	4.0
		標準偏差	1.3	0.5	0.6	0.3	0.4	0.4	0.6	0.8	0.4	0.6	0.5	0.5	0.7	0.9	0.9	1.0
ゴルフ	20	平均	4.0	4.4	4.4	4.6	4.3	4.6	4.4	4.6	4.3	4.4	4.5	4.3	4.5	4.3	4.2	4.4
		標準偏差	0.8	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.8	1.0	0.5	0.8	0.9	0.6	0.6	0.9	0.7
サッカー	25	平均	4.3	4.7	4.8	5.0	4.8	4.8	4.8	4.8	4.3	4.5	4.8	4.7	4.6	4.6	4.4	4.4
		標準偏差	0.9	0.6	0.4	0.2	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.5	0.4	0.6	0.5	0.6	0.7	0.8
自動車	8	平均	4.6	4.3	4.3	4.9	4.6	4.0	4.5	4.4	4.5	4.3	4.9	4.3	4.8	3.1	4.1	4.1
		標準偏差	0.7	1.0	1.4	0.4	0.7	1.1	0.5	1.4	1.1	1.0	0.4	1.2	0.5	1.2	0.8	1.0
柔道	1	平均	3.0	4.0	5.0	5.0	4.0	5.0	4.0	5.0	5.0	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	4.0
		標準偏差																
水泳	16	平均	4.3	4.6	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.8	4.4	4.6	4.8	4.6	4.5	4.7	4.3	4.5
		標準偏差	0.7	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.7	0.5	0.4	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6
水球	3	平均	4.3	4.7	4.7	5.0	5.0	4.7	4.7	4.3	4.3	4.3	4.7	4.7	4.3	4.7	4.3	4.7
		標準偏差	1.2	0.6	0.6	0.0	0.0	0.6	0.6	1.2	1.2	1.2	0.6	0.6	1.2	0.6	1.2	0.6
ソフトテニス	1	平均	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		標準偏差																
ソフトボール	14	平均	4.1	4.8	4.7	4.6	4.7	4.9	4.8	4.9	4.4	4.4	4.9	5.0	5.0	4.6	4.4	4.8
		標準偏差	1.2	0.4	0.5	0.6	0.6	0.4	0.4	0.4	0.6	0.6	0.3	0.0	0.0	0.5	0.6	0.4
卓球	11	平均	4.5	4.9	4.5	4.9	4.5	4.5	4.5	4.5	4.4	4.5	4.5	4.6	4.6	4.3	3.9	3.9
		標準偏差	0.5	0.3	0.7	0.3	1.0	0.5	0.7	0.7	0.9	0.5	0.7	0.5	0.5	0.8	0.9	1.1
テニス	65	平均	4.0	4.7	4.7	4.9	4.7	4.8	4.6	4.7	4.5	4.5	4.8	4.6	4.7	4.6	4.5	4.4
		標準偏差	0.9	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.6	0.6	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7	0.8
軟式野球	3	平均	4.3	5.0	5.0	5.0	4.7	4.7	5.0	4.7	4.3	5.0	5.0	4.7	4.3	5.0	4.7	4.3
		標準偏差	0.6	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0	0.6	0.6	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0	0.6	1.2
ニュースポーツ	19	平均	3.8	4.6	4.8	5.0	4.8	4.8	4.4	4.8	4.3	4.4	4.8	4.9	4.7	4.3	4.0	4.2
		標準偏差	1.0	0.6	0.4	0.0	0.4	0.4	0.8	0.4	0.7	0.8	0.4	0.2	0.6	0.7	0.7	0.5
バスケットボール	141	平均	4.1	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.7	4.8	4.5	4.6	4.8	4.8	4.7	4.8	4.4	4.6
		標準偏差	1.0	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.6	0.5	0.7	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.9	0.6
バドミントン	68	平均	3.8	4.6	4.6	4.8	4.6	4.6	4.5	4.6	4.6	4.3	4.6	4.5	4.5	4.5	4.3	4.4
		標準偏差	0.9	0.5	0.5	0.4	0.6	0.7	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.8	0.7	0.6	0.8	0.7
バレエエクササイズ	3	平均	4.3	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.3	4.3	5.0	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7
		標準偏差	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6
バレーボール	47	平均	3.9	4.3	4.6	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.2	4.4	4.6	4.6	4.6	4.4	4.1	4.3
		標準偏差	1.0	0.9	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.7	1.1	0.8	0.7	0.8	0.7	0.8	1.0	0.7
ハンドボール	14	平均	4.3	4.6	4.6	4.8	4.6	4.6	4.8	4.5	4.4	4.4	4.4	4.7	4.6	4.7	4.4	4.6
		標準偏差	0.8	0.5	0.6	0.4	0.6	0.5	0.4	0.7	0.8	0.6	0.8	0.6	0.5	0.5	0.7	0.5
フィットネストレーニング	51	平均	4.0	4.7	4.6	4.8	4.5	4.4	4.5	4.7	4.2	4.4	4.6	4.4	4.5	4.6	4.0	4.3
		標準偏差	0.8	0.5	0.7	0.5	0.5	0.8	0.5	0.6	0.7	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.9	0.6
フェンシング	2	平均	3.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	5.0
		標準偏差	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	0.0
フットサル	35	平均	3.9	4.6	4.6	4.7	4.6	4.7	4.7	4.6	4.5	4.5	4.8	4.6	4.5	4.7	4.3	4.5
		標準偏差	1.3	0.7	0.7	0.6	0.7	0.5	0.5	0.7	0.7	0.7	0.5	0.7	0.7	0.4	0.8	0.6
フライングディスク	9	平均	3.7	4.9	4.4	4.8	4.6	4.6	4.2	4.7	4.4	4.0	4.3	4.4	4.1	4.2	3.8	4.2
		標準偏差	1.2	0.3	0.5	0.4	0.7	0.5	0.7	0.5	0.9	0.7	0.7	0.5	0.9	0.7	1.1	0.8
ボクシング	9	平均	3.4	4.9	4.9	4.4	4.6	4.7	4.6	4.8	4.4	4.3	4.4	4.3	4.7	4.4	4.3	4.5
		標準偏差	1.4	0.3	0.3	1.1	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
ボディコンディショニング	3	平均	4.0	4.3	4.7	4.7	4.3	4.7	4.3	4.7	3.7	4.0	4.7	4.0	3.7	4.3	3.7	3.7
		標準偏差	1.0	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	2.3	1.0	0.6	0.0	1.5	1.2	0.6	0.6
ボディメイクエクササイズ	5	平均	4.2	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	5.0
		標準偏差	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0
陸上競技	1	平均	3.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		標準偏差																
実技全体	690	平均	4.0	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.6	4.7	4.5	4.5	4.7	4.6	4.6	4.6	4.2	4.4
		標準偏差	0.9	0.6	0.6	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.8	0.7

表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	0	平均																
		標準偏差																
合気道	12	平均	4.6	4.9	4.8	5.0	4.9	5.0	4.8	4.8	4.7	4.8	4.9	4.6	4.6	4.7	4.6	4.8
		標準偏差	0.5	0.3	0.4	0.0	0.3	0.0	0.4	0.5	0.5	0.5	0.3	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
インドアスポーツ	2	平均	4.5	4.5	5.0	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5
		標準偏差	0.7	0.7	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
ウォーキングエクササイズ	5	平均	4.6	4.8	4.4	4.8	4.8	4.6	4.4	4.8	4.2	4.6	4.6	5.0	4.8	4.4	3.8	4.2
		標準偏差	0.5	0.4	0.9	0.4	0.4	0.9	0.9	0.4	0.8	0.5	0.5	0.0	0.4	0.9	1.3	0.8
エアロビクス	46	平均	4.1	4.7	4.7	4.8	4.7	4.9	4.7	4.8	4.3	4.4	4.6	4.3	4.6	4.6	4.0	4.4
		標準偏差	0.8	0.5	0.5	0.4	0.5	0.3	0.5	0.4	0.6	0.6	0.5	0.8	0.6	0.5	0.8	0.8
空手	1	平均	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
		標準偏差																
器械体操	2	平均	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	5.0	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
		標準偏差	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.0	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7
気功	8	平均	4.8	4.6	4.6	4.3	3.6	4.4	4.5	4.4	4.4	4.8	3.8	4.1	4.5	3.0	3.8	3.0
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7	0.8	0.5	0.5	0.5	0.9	0.4	0.5	1.2	0.7	1.4
弓術	9	平均	4.3	4.3	4.8	5.0	4.6	4.9	4.8	4.8	4.7	4.3	4.8	4.7	4.6	4.2	4.1	4.2
		標準偏差	0.9	0.7	0.4	0.0	0.5	0.3	0.4	0.4	0.5	0.9	0.4	0.5	0.7	0.8	0.8	0.8
剣道	25	平均	4.4	4.8	4.8	4.9	4.8	4.9	4.7	4.8	4.7	4.6	4.8	4.7	4.5	4.4	4.3	4.3
		標準偏差	0.9	0.4	0.4	0.6	0.4	0.3	0.5	0.4	0.6	0.6	0.4	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6
ゴルフ	19	平均	4.3	4.5	4.6	4.8	4.2	4.6	4.5	4.6	4.3	4.1	4.6	4.4	4.4	4.0	4.4	3.9
		標準偏差	0.7	0.5	0.5	0.4	0.7	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5	0.5	0.6	0.9	0.7	1.0	0.7
サッカー	27	平均	4.1	4.6	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.4	4.6	4.8	4.7	4.6	4.6	4.4	4.6
		標準偏差	1.0	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.6	0.7	0.4	0.6	0.6	0.6	0.8	0.8
自動車	2	平均	4.5	4.5	4.0	4.5	4.0	3.5	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	2.5	4.0	3.0	4.0	3.0
		標準偏差	0.7	0.7	0.0	0.7	0.0	0.7	1.4	1.4	0.0	0.0	0.0	2.1	0.0	1.4	0.0	0.0
柔道	1	平均	5.0	5.0	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	5.0	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0
		標準偏差																
ジョギング	1	平均	4.0	5.0	4.0	5.0	4.0	4.0	4.0	3.0	5.0	4.0	5.0	4.0	3.0	4.0	3.0	3.0
		標準偏差																
水泳	13	平均	3.8	4.6	4.6	4.8	4.7	4.4	4.6	4.6	4.2	4.5	4.6	4.5	4.3	4.5	4.2	4.2
		標準偏差	0.8	0.7	0.7	0.4	0.5	0.8	0.5	0.5	0.9	0.5	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.9
水球	5	平均	4.6	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8
		標準偏差	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
ソフトテニス	2	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ソフトボール	10	平均	4.7	4.5	4.8	4.5	4.7	4.9	5.0	5.0	4.5	4.7	4.9	4.9	4.9	4.6	4.7	4.7
		標準偏差	0.9	0.7	0.4	0.7	0.5	0.3	0.0	0.0	0.7	0.5	0.3	0.3	0.3	0.7	0.5	0.7
卓球	11	平均	4.4	4.8	4.5	4.8	4.5	4.5	4.5	4.7	4.5	4.5	4.6	4.5	4.7	4.1	4.0	4.5
		標準偏差	0.5	0.4	0.5	0.4	0.7	0.7	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.6	0.5	0.8	0.5
テニス	44	平均	3.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.4	4.6	4.7	4.6	4.5	4.5	4.3	4.3
		標準偏差	1.0	0.7	0.6	0.7	0.5	0.4	0.7	0.8	0.8	0.7	0.6	0.7	0.8	0.7	0.9	0.9
軟式野球	3	平均	4.0	4.7	4.7	4.3	4.7	4.7	4.7	4.7	4.3	4.0	5.0	4.7	4.3	4.7	4.0	3.7
		標準偏差	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.0	0.0	0.6	0.6	0.6	0.0	0.6
ニュースポーツ	5	平均	4.2	4.6	5.0	5.0	5.0	5.0	4.6	5.0	4.6	4.2	5.0	5.0	4.6	4.0	3.6	4.8
		標準偏差	0.8	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	1.3	0.0	0.0	0.5	0.7	1.1	0.4
バスケットボール	61	平均	3.7	4.6	4.4	4.6	4.4	4.3	4.4	4.7	4.0	4.3	4.5	4.7	4.5	4.6	4.4	4.5
		標準偏差	1.2	0.5	0.7	0.6	0.8	0.9	0.6	0.5	1.0	0.7	0.7	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5
バドミントン	37	平均	3.8	4.2	4.5	4.6	4.3	4.4	4.2	4.2	4.4	4.1	4.5	4.1	4.5	4.4	4.3	4.3
		標準偏差	1.0	0.5	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7	0.9	0.6	0.7	0.6	0.9	0.6	0.6	0.8	0.8
バレエエクササイズ	1	平均	4.0	4.0	4.0	4.0	3.0	4.0	4.0	4.0	3.0	3.0	4.0	4.0	4.0	4.0	3.0	
		標準偏差																
バレーボール	44	平均	3.8	4.3	4.6	4.7	4.6	4.7	4.6	4.7	4.3	4.5	4.6	4.7	4.6	4.5	4.4	4.5
		標準偏差	1.0	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5
ハンドボール	14	平均	4.1	4.4	4.4	4.7	4.4	4.6	4.4	4.2	4.3	4.2	4.7	4.5	4.4	4.4	4.2	4.4
		標準偏差	0.9	0.6	0.8	0.5	0.8	0.5	0.7	0.8	0.6	0.6	0.5	0.8	0.6	0.6	0.6	0.7
フィットネストレーニング	49	平均	3.9	4.6	4.5	4.7	4.4	4.5	4.4	4.5	4.2	4.4	4.5	4.2	4.4	4.6	4.0	4.4
		標準偏差	0.9	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.7	0.8	0.8	0.7	0.6	0.9	0.6	0.6	0.8	0.6
フェンシング	1	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	5.0	4.0
		標準偏差																
フットサル	28	平均	4.5	4.7	4.7	4.8	4.7	4.9	4.6	4.8	4.4	4.6	4.8	4.6	4.6	4.7	4.3	4.4
		標準偏差	0.6	0.5	0.5	0.6	0.5	0.4	0.6	0.4	0.7	0.5	0.4	0.6	0.6	0.5	0.8	0.9
フライングディスク	8	平均	4.1	4.4	4.8	4.9	4.6	4.6	4.4	4.6	4.4	4.4	4.4	4.1	4.1	4.3	3.8	3.9
		標準偏差	0.6	0.7	0.5	0.4	0.7	0.7	0.7	0.5	0.5	0.7	1.1	0.6	0.6	0.9	0.9	0.8
ボクシング	6	平均	3.7	4.8	5.0	5.0	5.0	4.8	4.5	5.0	4.7	4.3	4.8	4.5	4.3	4.7	4.6	4.7
		標準偏差	1.5	0.4	0.0	0.0	0.0	0.4	0.5	0.0	0.5	0.5	0.4	0.5	0.8	0.5	0.5	0.5
ボディコンディショニング	6	平均	4.5	4.8	4.8	5.0	4.5	5.0	4.7	5.0	4.5	4.5	4.8	4.5	4.7	4.7	4.3	3.8
		標準偏差	0.5	0.4	0.4	0.0	0.8	0.0	0.5	0.0	0.8	0.8	0.4	0.5	0.5	0.5	0.8	1.2
ボディメイクエクササイズ	0	平均																
		標準偏差																
野球	1	平均	1.0	4.0	3.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	5.0	4.0	3.0	5.0	4.0	2.0	2.0	2.0
		標準偏差																
実技全体	509	平均	4.0	4.6	4.6	4.7	4.6	4.6	4.5	4.6	4.4	4.4	4.6	4.5	4.5	4.5	4.2	4.4
		標準偏差	0.9	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.8	0.7

2）シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における５段階評価（平均値±標準偏差）を図Ⅲ−1−3に、また種目別の５段階評価を表Ⅲ−1−10に示した。すべての項目とも平均値で４点をこえる肯定的評価が得られている。特に「教員の指導、教授方法は適切であった」「この授業は塾生にとってふさわしいものだった」「クラスの雰囲気は良好だった」などが高い得点を示した。一方、「この授業によって運動技術が向上した」は他の項目と比較して低い値を示した。



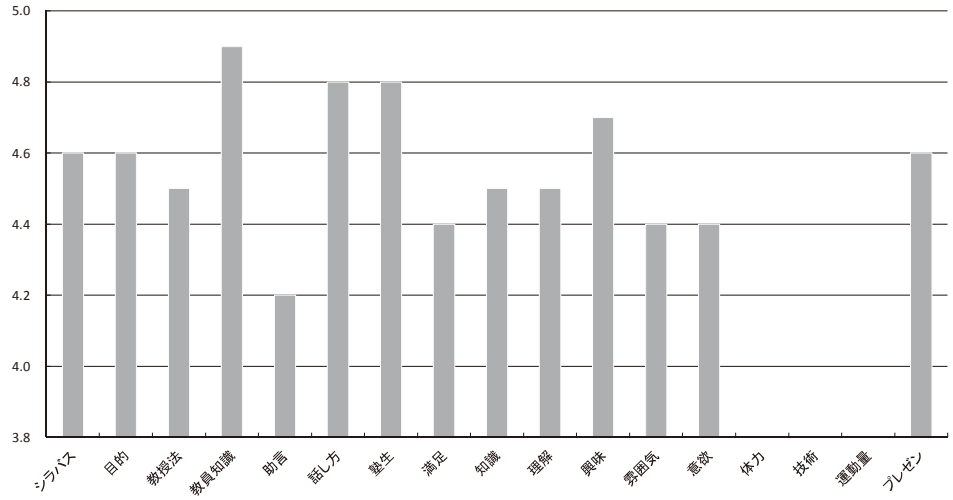
図Ⅲ−1−3. シーズンスポーツ種目における５段階評価（平均値 ± 標準偏差）

表Ⅲ−1−10. 種目別の５段階評価集計一覧（シーズンスポーツ）

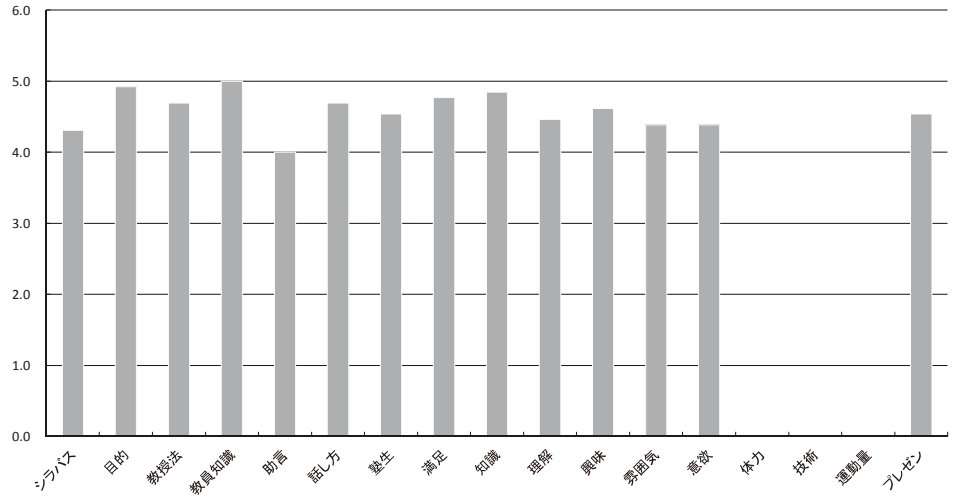
種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アウトドアレクリエーション	21	平均	4.1	4.5	4.7	4.9	4.7	4.8	4.8	4.9	4.7	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.0	4.4
		標準偏差	1.1	0.5	0.7	0.4	0.8	0.5	0.4	0.4	0.5	0.6	0.6	0.4	0.8	0.7	0.9	0.7
弓術	28	平均	4.7	5.0	4.9	5.0	5.0	4.9	5.0	4.9	4.9	4.8	5.0	4.9	4.9	4.7	4.5	4.5
		標準偏差	0.6	0.2	0.3	0.2	0.2	0.3	0.2	0.3	0.3	0.4	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.5
山岳	8	平均	4.3	4.6	4.9	5.0	4.9	4.8	4.9	4.9	4.9	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	1.0	0.5	0.4	0.0	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.7	0.5
馬術	25	平均	4.6	4.6	4.6	4.5	4.5	4.5	4.8	4.9	4.8	4.6	4.9	4.9	4.9	4.5	4.4	4.0
		標準偏差	0.6	0.5	0.5	0.7	0.6	0.7	0.4	0.3	0.4	0.6	0.3	0.3	0.3	0.5	0.6	1.1
ビーチバレー	8	平均	4.4	4.8	5.0	5.0	5.0	4.9	4.8	4.8	4.1	4.8	5.0	4.8	4.4	4.8	4.3	4.1
		標準偏差	1.4	0.5	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	0.5	1.0	0.5	0.0	0.5	0.9	0.5	0.9	1.0
スケート	5	平均	4.6	4.4	4.2	4.2	4.0	4.2	4.6	4.4	4.8	4.0	4.8	4.4	4.8	4.8	4.4	4.4
		標準偏差	0.9	0.5	0.8	0.8	1.0	0.8	0.5	0.5	0.4	1.0	0.4	0.9	0.4	0.4	0.9	0.5
スキー	1	平均	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	5.0	5.0	5.0	4.0	5.0	4.0
		標準偏差																
マリンスポーツアクティビティ	20	平均	4.3	4.5	4.8	4.9	4.7	4.9	4.6	4.5	4.6	4.6	4.7	4.7	4.6	4.7	4.4	4.3
		標準偏差	0.7	0.8	0.4	0.4	0.6	0.4	0.8	0.8	0.8	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.8	0.9
ヨット	12	平均	4.3	4.6	4.8	4.5	4.8	4.6	4.8	4.8	4.4	4.3	4.8	4.3	4.4	4.2	4.0	4.3
		標準偏差	1.0	0.9	0.6	1.2	0.5	0.5	0.4	0.5	1.2	1.2	0.5	1.2	0.9	1.0	1.0	1.0
講義全体	128	平均	4.4	4.6	4.8	4.8	4.7	4.7	4.8	4.8	4.7	4.6	4.8	4.8	4.7	4.6	4.3	4.3
			0.8	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.4	0.6	0.6	0.6	0.8	0.8

3）講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価についての結果を図Ⅲ−1−4（春学期）、図Ⅲ−1−5（秋学期）に示した。すべての項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に昨年度同様、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」は高値を示した。（春：4.9±0.3、秋：5.0±0.0）また、「教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した」の項目は低値を示す結果であった。これらのことは、やや教員側の一方的な授業になりがちであるのかもしれない。学生とのコミュニケーションや、学生が授業に意欲歴に取り組めるような授業づくりが今後の課題と考えられる。



図Ⅲ−1−4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期講義・演習の全体平均）



図Ⅲ−1−5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義・演習の全体平均）

3．通信教育対象科目

1）体育理論

レポートおよび試験問題の出題・採点を、植田史生君、加藤幸司君、村松憲君で担当した。また夏期スクーリング（平成25年８月７日から８月12日）においても体育理論をこの３名で担当した。スクーリングにおける各教員のテーマを表Ⅲ−1−11に示す。

表Ⅲ-1-11．平成25年度通信教育部体育理論（スクーリング）開講科目および担当者一覧

	担当者	テーマ
体育理論	植田　史生	スポーツと人間のかかわり・スポーツ文化
	加藤　幸司	形態や機能の成長・発達・加齢変化トレーニング
	村松　憲	人体の形態や機能

2）体育実技スクーリング

夏期・立科合宿・秋期において体育実技を開講した。

夏期は平成25年８月７日から８月12日の６日間、11種目を日吉キャンパスにて実施した。

新設された立科合宿は平成25年９月13日〜16日の間、慶應義塾立科山荘（長野県北佐久郡立科町）において、ヨガ＆ピラティス、レクリエーショナル・スポーツ（計２種目）を実施した。

秋期は平成25年11月１日（金）〜４日（月）まで、日吉キャンパスにてウォーキングエクササイズを行った。

これらの担当者および履修者数を表Ⅲ−1−12に示す。

表Ⅲ-1-12．平成25年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種目名	担当者	定員	履修者数	充足率
夏期	エアロビクス	佐々木玲子	20	17	85%
	剣道	植田　史生	20	4	20%
	ゴルフ	勝又　正浩	20	21	105%
	体力アップコース	山内　賢	25	23	92%
	卓球	木林　弥生	30	22	73%
	バスケットボール	加藤　大仁	25	19	76%
	バドミントン	加藤　幸司	20	17	85%
	テニス	村松　憲	20	18	90%
	フットサル	須田　芳正	25	18	72%
	太極拳	孔　徳勝	20	18	90%
	水泳	鳥海　崇	40	29	73%
立科	ヨガ＆ピラティス	杉本　亮子	20	18	90%
	レクリエーショナルスポーツ	村山　光義	20	8	40%
秋期	ウォーキングエクササイズ	近藤　明彦	30	26	87%
	合計		335	258	77%

4．塾内における授業担当

日吉、三田及び芝共立において開講される体育研究所設置の体育科目および通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、各学部の設置科目の開講についても協力している。平成25年度の他学部設置科目及び担当者を表Ⅲ-1-13に示す。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当および協力

授 業 科 目 名	担 当 者	開講学部など	曜日時限など
健康科学	奥山　静代	薬学部	春学期金曜３時限
薬学的保健体験学習	野口　和行	薬学部	秋学期火曜１，３時限
体育Ⅰ	野口　和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期火曜３時限
体育Ⅱ・Ⅲ（野外スポーツ）	野口　和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期火曜２時限
体育Ⅰ	村山　光義	総合政策学部 環境情報学部	春学期金曜３，４時限
体育Ⅱ・Ⅲ （レクリエーションスポーツ、フライングディスク）	村山　光義	総合政策学部 環境情報学部	秋学期金曜２・３時限
体育Ⅱ・Ⅲ（水泳）	森下　愛子	総合政策学部 環境情報学部	春秋学期木曜３時限， 金曜２・３時限
人体の科学	佐々木玲子 村山　光義	理工学部	秋学期水曜５時限

Ⅲ－２　スポーツイベントの開催

１．塾長杯・塾内競技大会

１）塾長杯バレーボール大会

１．開催日：平成25年６月８日（土）
２．会　場：日吉記念館
３．開催時間：９:00～17:00
４．参加チーム数：24チーム
（チャンピオンリーグ ６、エンジョイリーグ18）
５．参加者数：約285名
（塾生170名、教職員約15名、
観客約100名）
６．ゲーム数：48試合
予選リーグ 24 試合 / 決勝トーナメント９試合
７．協　力：大会実行学生スタッフ
放送研究会（K-Sound）
UNICORNS songleaders
８．表彰チーム
チャンピオンリーグ
優勝：なかけん会
２位：教員チーム
３位：伊達工業高等学校
エンジョイリーグ
優勝：銀河系軍団
２位：あかりかり梅
９．コメント：

この大会には、チャンピオンリーグ、エンジョイリーグの計24チームが参加した。塾内のバレーボールサークルのメンバーが参加したチャンピオンリーグには、急遽教員チームを結成し、2 ブロックに分かれてリーグ戦を行い、各ブロックの１位を勝敗で、1 位から３位までを得失点差で順位付けした。その順位付けに基づき決勝リーグ進出トーナメントを行い、決勝リーグを行った。

また、エンジョイリーグは例年通り女子の参加も多く、3 チーム 6 ブロックに分かれ、リーグ戦が行われた。

チャンピオンリーグ、エンジョイリーグともに白熱のゲームが続き、教職員チームの参戦も相まって大盛況であった。

さらに、放送研究会のアナウンス円滑な試合進行に貢献しただけでなく、UNICORNS songleaders のパフォーマンズもあり、大会を大いに盛り上げてくれた。

２）塾長杯フットサル大会

１．開催日：平成25年７月６日（土）
２．会　場：日吉記念館
３．開催時間：９:00～17:00
４．参加チーム数：32チーム
５．参加者数：約357名
（登録選手数242名、教職員約15名、
観客約100名）
６．ゲーム数：55ゲーム
（１ゲーム15分間、最低３ゲーム、
最高６ゲーム）
７．協　力：独立団体フットサル倶楽部
放送研究会（K-Sound）
８．参加チーム抽選会：
平成25年６月26日（水）16:30～17:30
スポーツ棟（体育研究所）２F 会議室
９．応募チーム数：34チーム
10．表彰チーム
優勝：maruco F.C.
２位：まるこ
３位：TED LAPIUS
K.F.L
11．コメント：

本大会では、代表者を抽選会当日に集め、参加チームを決定する抽選会を経て開催される。本年度は、抽選会参加チーム 31 チームと教職員チームを含めた 32 チームにおいて組み合わせの抽選を行った。

一喜一憂して選ばれた参加チームには、大会当日集合時間より早く集まり練習したり、ユニフォームを揃えたりと意気込みの強いチームが多数見られた。日吉記念館に３コート作り、予選リーグは12分間×１本、決勝トーナメントは15分間の一発勝負で優勝の栄光を賭けた激しい試合がいくつも繰り広げられた。目の前のボールを必死で追いかける選手の様子と、彼らを見守る声援により記念館内は、爽やかに汗を掻く塾生の笑顔で輝いていた。

3）塾長杯バスケットボール大会

1．開催日：平成25年12月14日（土）
2．会　場：日吉記念館
3．開催時間：９:00～17:00
4．参加チーム数：24チーム
5．参加者数：約200名
（観客約100名）
6．ゲーム数：50試合
（予選：６分×２（ハーフタイム１分)、
決勝：８分×２（ハーフタイム２分)、
決勝戦10分×２（ハーフタイム２分))
7．協　力：大会実行学生スタッフ
放送研究会（K-Sound）
UNICORNS
審判団（日体大）
8．参加チーム抽選会：
平成25年12月４日（水）17:00～18:00
スポーツ棟（体育研究所）２F 会議室
9．応募チーム数：34チーム
10．表彰チーム
アルティメットリーグ
優勝：Ｓバス
２位：ハングリー
エンジョイリーグ
優勝：YBC
２位：G.B.B
11．コメント：
アルティメットリーグでは、技術・技能とも高いと自称するチーム対象として、またエンジョイリーグでは、純粋にバスケットの試合を楽しみたいチームを対象となっている。両リーグともチームのカラーを出し切って、迫力ある競技が展開された。
運営は、大会実行学生スタッフが準備から片付け、受付やゲーム進行を行い、外部から資格を持つ学生審判を受け入れて行った。さらに塾内の放送研究会による試合実況放送や昼休みのエキシビジョンとしてUNICORNSによるチアリーディングが披露され、とても盛り上がった。本大会は参加選手、大会実行学生スタッフ、観戦者、教職員が一体となった大会であった。

4）新春塾内卓球大会

1．開催日：平成26年１月18日（土）
2．会　場：スポーツ棟（体育研究所）
地下１階卓球場
3．開催時間：10:00～15:00
4．参加者数：60名
（塾生，教職員及び卒業生60名、
学生スタッフ　５名）
（シングルス35名、ダブルス15ペア）
5．ゲーム形式
予選リーグ：11点先取３セットマッチ
決勝トーナメント：11点先取３セットマッチ（決勝のみ５セットマッチ）
6．表彰チーム
ダブルス（中・上級の部）
優勝：伊藤晋太郎（理工４年）
森　　優貴（経済２年）
準優勝：石井　隆介（商３年）
秋山　昌弘（卒業生）

ダブルス（温泉の部）
優勝：外川翔一郎（商４年）
森本　弘殻（法４年）
準優勝：飯田　賢一（教職員）
庄山　則子（教職員）

シングルス（上級の部）
　優勝：藤井　嘉之（総合２年）
準優勝：K　　（総合１年）

シングルス（中級の部）
　優勝：高橋　慶光（文４年）
準優勝：壁谷　卓末（理Ｍ２年）

シングルス（温泉の部）
　優勝：坂野　彰（法４年）
準優勝：菊谷　光（文４年）

7．コメント：
　本大会において、木林弥生君（体育研究所非常勤講師卓球担当）には、当委員会にご協力いただき、大会の事前準備から当日運営に至るまで、ご本人の卓球に関するご経験を活かし、大会の円滑な運営にご尽力いただいた。また、卒業生の方々と対戦したことで、時代を超えた繋がりができた大会となった。

2．公開講座

1）ヨガ＆ピラティス

1．日　程：
　平成25年６月３日（月）、５（水）、
　10日（月）、12日（水）、17日（月）、
　19日（水）、24日（月）、26日（水）
2．会　場：協生館エクササイズスタジオ
3．開催時間：18:30～19:30
4．講　師：杉本亮子
　（体育研究所非常勤講師）
5．参加者数：21名
　（男性１名、女性20名）
6．受講料：4,000円（塾内2,000円）
7．コメント：
　本講座は、授業でも大人気の種目で、今回の申込も数日にして定員になったほどの大人気ぶりだった。ヨガとピラティスの呼吸法の違いを体験することをはじめ、その呼吸法の違いを感じながらポーズをとるといった、初めての方でも気軽に受けることができた。ぜひ、継続して開講してほしいとの大好評講座であった。

3．所内施設の開放

1）プール一般開放

1．期　間：
【春学期】
　平成25年５月９日（木）～７月11日（木）
　※毎週木曜日のみ
【秋学期】
　平成25年10月３日（木）～12月26日（木）
　※毎週月曜・木曜
2．時　間：12:15～13:00
3．場　所：協生館プール
4．対象者：学部生、大学院生（留学生含）
5．受付・監視：古城翔麻君（理工Ｍ１）
　村木功治君（理工４年）
　佐藤雅彦君（経済４年）
　鳥海　崇 / 森下愛子
6．利用者数：延べ243名
【春学期】延べ157名
　（延べ男子146名、女子11名）
【秋学期】延べ86名
　（延べ男子75名、女子11名）
7．コメント：
　昨年度の特別一般開放や本年度の新入生歓迎行事での体験会もあり、毎週15名

程度の学生が利用していた。毎週泳ぎにくるといった学生もおり、今後のプール利用方法に向けて好感触となる開放となった。

2）協生館トレーニングルーム一般開放

1．期　間：

【春学期】

平成25年５月７日（火）～７月11日（木）

【秋学期】

平成25年10月１日（火）

～平成26年１月９日（木）

2．曜日時間：火・木・金　15:00～18:00

3．担当者

【春学期】

火：川畑賀央君 / 商学部１年

木：杉本理沙君 / 法学部２年

金：森下愛子 / 永田直也（助教）

【秋学期】

火：吉田美咲君 / 経済学部１年

木：松田紗季君 / 経済学部１年

金：森下愛子 / 永田直也（助教）

4．利用者数：1220名

（春学期638名、秋学期582名）

5．コメント：

本年度は火曜、木曜、金曜の 15:00 ～ 18:00 において協生館トレーニングルームの開放を行った。学生間の認知度も上がり、女子学生の利用もみられるようになった。利用者数は年々増加しおり、最近では時間帯によっては混雑することもあるので、トレーニング機器の占有をせず、譲り合って効率的な利用ができるようにしている。

3）多目的コートの貸出

1．曜日時間：平日　授業終了後

土日　終日可

2．利用状況：190団体

（春学期112団体、秋学期78団体）

3．日数：153日 / 128日稼働

（春学期72日 / 56日稼働、秋学期81日 / 64日稼働）

4．コメント：

トレーニングルームの開放同様に、塾生間の認知度が上がり、多数の団体からの借用申請でほぼ毎日埋まっている。最近では、「多目的コート貸出」という題目の本旨のように、多種目での利用者団体が増加し、団体間の交流もさらに深まっている。今後は利用者へのさらなる周知をするとともに、塾長杯バレーボール大会の予選等、塾生の交流の場として運用していきたい。

Ⅲ－3　他機関との連携

1．公開講座

1）慶應義塾大学・読売新聞社　横浜市民講座「スポーツの見方・楽しみ方」

タイトル：トップアスリートの心の中はどうなっているのか？
～大舞台で実力を発揮する秘訣を探る～

日　　程：平成25年12月14日（土）

会　　場：日吉キャンパス　第４校舎独立館 DB203教室

開催時間：14:00～15:30

対 象 者：誰でも参加可（定員：400名）

コーディネーター：佐々木　玲子　　講師：永田　直也

参加者数：140名

受 講 料：無料

2．一貫校連携

1）幼稚舎館山遠泳合宿（水泳指導教員）

日　　程：平成25年７月21～25日

会　　場：千葉県館山市見物海岸

対 象 者：６年生

講　　師：石手　靖、鳥海　崇、森下　愛子

参加者数：24名

2）幼稚舎特別授業（体育：サッカー）

日　　程：平成25年12月６日

会　　場：幼稚舎グラウンド

開催時間：８:50～12:00

対 象 者：６年生

講　　師：須田　芳正

参加者数：144名

3．体育会支援

植田　史生　参与（９月30日まで）

綿田　博人　副理事、高等学校硬式野球部特別招聘コーチ

石手　靖　　副理事（９月30日まで）、参与（10月１日より）

吉田　泰将　剣道部師範、医学部剣道部師範代行

加藤　幸司　バトミントン部ヘッドコーチ

須田　芳正　ソッカー部監督

鳥海　崇　　水泳部水球部門コーチ、副理事（10月１日より）

坂井　利彰　庭球部監督

Ⅳ. 業務活動記録

Ⅳ．業務活動記録

平成25年度総務分野関係報告

1　人　事

⑴　就任（継続）
坂井利彰君（専任講師（有期）
（４月１日～８月31日）
森下愛子君（助教（有期））（４月１日付）
永田直也君（助教（有期））（４月１日付）

⑵　就任（新任）
坂井利彰君（専任講師）（９月１日付）

⑶　所長の交代
植田史生君から石手　靖君
（10月１日付）

⑷　主事の交代
渡辺秀人君から黒田修生君
（11月１日付）

⑸　退職（任期満了）
森下愛子君（３月31日付）

2　塾内役職

⑴　大学寄宿舎舎監　近藤明彦君

⑵　大学寄宿舎委員会委員　近藤明彦君

⑶　大学教養研究センター運営委員
植田史生君（所長）（～９月30日）
石手　靖君（所長）（10月１日～）

⑷　大学教養研究センター所員
石手　靖君、近藤明彦君、村山光義君、
吉田泰将君、加藤大仁君、野口和行君、
村松　憲君、佐々木玲子君、山内　賢君

⑸　大学学生総合センター副部長（日吉支部）
石手　靖君（～９月30日）
村山光義君（10月１日～）

⑸　体育会副理事
綿田博人君、石手　靖君（～９月30日）
鳥海　崇君（10月１日～）

⑺　日吉キャンパスカレンダー編集委員長
奥山静代君

⑻　極東証券寄附講座「生命の教養学」企画委員
鳥海　崇君

⑼　日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手　靖君

⑽　立科山荘運営委員会委員
野口和行君

⑾　日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
佐々木玲子君

⑿　記念館運営連絡協議会委員
植田史生君（所長）（～９月30日）
石手　靖君（所長）（10月１日～）
加藤幸司君、鳥海　崇君

⒀　総合研究推進機構研究倫理委員会研究倫理審査委員会委員　佐々木玲子君

⒁　人事委員会委員
石手　靖君、植田史生君、近藤明彦君、
佐々木玲子君、綿田博人君、村山光義君

⒂　体育会参与
植田史生君（所長）（～９月30日）
石手　靖君（10月１日～）

⒃　大学保健管理センター運営委員
植田史生君（所長）（～９月30日）
石手　靖君（所長）（10月１日～）

⒄　大学スポーツ医学研究センター運営委員
植田史生君（所長）（～９月30日）
石手　靖君（所長）（10月１日～）

⒅　日吉キャンパス運営委員
植田史生君（所長）（～９月30日）
石手　靖君（所長）（10月１日～）

⒆　Hiyoshi Research Portfolio（HRP）運営委員
植田史生君（所長）（～９月30日）
石手　靖君（所長）（10月１日～）
加藤幸司君、鳥海　崇君

⒇　Hiyoshi Research Portfolio（HRP）実行委員
村山光義君

(21)　慶應義塾大学通信教育部学習指導副主任
石手　靖君（～９月30日）
村松　憲君（10月１日～）

3　研究所内役職の主なもの

⑴　所　長
植田史生君（～９月30日）
石手　靖君（10月１日～）

⑵　副所長
綿田博人君（～９月30日　任期終了）

⑶　学習指導主任
石手　靖君（～９月30日）
野口和行君（10月１日～）

⑷　学習指導副主任
村山光義君（～９月30日）
須田芳正君（10月１日～）

⑸　総務委員会委員長
吉田泰将君

⑹　教育委員会委員長
石手　靖君（～９月30日）
野口和行君（10月１日～）

⑺　研究委員会委員長
村山光義君

⑻　スポーツ振興委員会委員長
加藤幸司君

⑼　将来構想委員会委員長
加藤大仁君（～９月30日）
村松　憲君（10月１日～）

⑽　活動報告書編集委員会委員長
吉田泰将君

（主事　黒田修生）

平成25年度活動報告書

平成26年７月１日発行

［非売品］

編　集：活動報告書編集委員会
吉田　泰将（委員長）
板垣　悦子　　村松　　憲　　鳥海　　崇
永田　直也　　福士　徳文

発　行：慶應義塾大学体育研究所
〒223-8521　横浜市港北区日吉４－１－１

制　作：(有)梅沢印刷所
〒108-8345　東京都港区三田２－15－45